

上大利北土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

牛頸本堂遺跡群Ⅳ

～ 第10・11次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第75集

2007

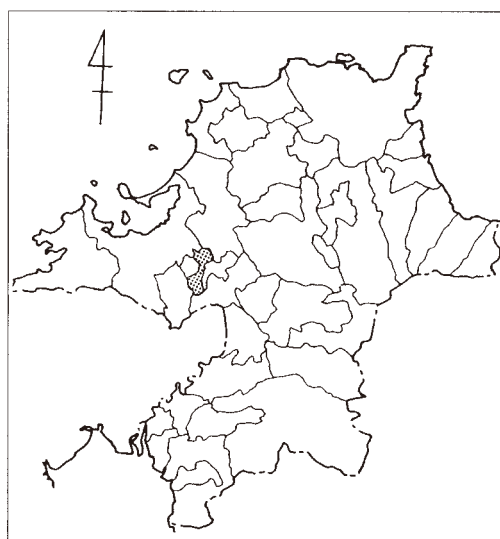
大野城市教育委員会

上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

うしくびほんどういせきぐん
牛頸本堂遺跡群Ⅳ

～ 第10・11次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第75集



2007

大野城市教育委員会

序

上大利地区では北・南の2地区で事業面積が48haに及ぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成13年度より本格的な発掘調査を実施しました。

今回報告する牛頸本堂遺跡第10・11次調査は、上大利北土地地区画整理事業地の東側に位置します。調査前は緑地開発により石垣や作業用道路が造られ、旧状から大きく削平されていると予想されていましたが、10次調査地では山の斜面を大きくカットした通路状の遺構が検出されました。平安時代ごろの造成と考えられ、平坦面には掘立柱建物が確認されることから、大規模な工事とともに計画的に建物が配置された事が分かり、新たな知見を得ることができました。

土地には時代を問わずそこで起こった様々な出来事が遺跡・遺構・遺物といった形で記録されています。この残された埋蔵文化財に関して、慎重に発掘調査を進め、人々の生活を記録し保存しています。本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願うとともに、今後とも文化財行政に対しまして、尚一層ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、上大利北土地地区画整理組合をはじめ(株)大成建設、工事関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成19年11月30日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が上大利北土地区画整理事業にともなって発掘調査を実施した、大野城市大字上大利所在の本堂遺跡第10・11次発掘調査の報告書である。なお上大利地区は牛頸窯跡群の範囲に含まれており、こうした歴史事象を踏まえたことから本書の表題を『牛頸本堂遺跡群』とした。
2. 発掘調査は、大野城市上大利北土地区画整理組合の委託を受け大野城市教育委員会が実施した。
3. 遺構写真は、石木秀啓・井上愛子・一瀬智(現福岡県教育委員会)が撮影した。
4. 遺物写真は、(有)文化財写真工房(岡紀久夫、埋蔵文化財写真研究会員)が撮影した。
5. 遺構平面実測図および個別実測図は、石木・井上(愛)・一瀬が作成した。また上大利地区旧地形図は、(株)写測エンジニアリングに委託した。なお、地形測量図のコンターは25cm間隔である。
6. 遺構実測図中の方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標(第II系)を示す。
7. 遺物実測図は、西堂将夫・一瀬・北川貴洋・井上(愛)・城門義廣(現福岡県教育委員会)・井上理香が作成した。
8. 製図は、全体図および一部の遺物を(株)埋蔵文化財サポートシステムがデジタルトレースをおこない、その他は渡部美香が作成した。
9. 拓本は、一瀬・西堂・北川・井上(愛)・城門が作成した。
10. 観察表は、井上(愛)が作成し、一部を(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用したものである。
12. 遺物の名称の内、須恵器蓋杯については平城宮分類による呼称を用いる。
13. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
14. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を使用した。
15. 本書の執筆は、文末に担当者名を記し、編集は石木がおこなった。

本文目次

I. はじめに	
1. 平成15年度の調査経過	1～7
2. 調査体制	7～8
II. 調査の結果	
1. 第10次調査	
A. 調査概要	9
B. 遺構と遺物	10～22
C. 小結.....	22
2. 第11次調査	
A. 調査概要	23～24
B. 遺構と遺物	24～31
C. 小結.....	31
III. まとめ.....	36

図 版 目 次

- 図版 1 10次S X01南半部分（北から）
- 図版 2 (1) 10次調査区全景（東から）
(2) 10次調査区全景（南から）
- 図版 3 (1) 10次S X01北側全景（西から）
(2) 10次S X01北側遺構検出状況（西から）
- 図版 4 (1) 10次S X01－ 1・ 2間土層（東から）
(2) 10次S X01－ 2・ 3間土層（東から）
(3) 10次S X01－ 4・ 5間土層（南から）
- 図版 5 (1) 10次S X01－ 5・ 6間土層（南から）
(2) 10次S X01－ 6・ 7間土層（南から）
(3) 10次S X01－ 7・ 8間土層（南から）
- 図版 6 (1) 10次S X01－ 8・ 9間土層（南から）
(2) 10次S X01－ 9・ 10間土層（南東から）
(3) 10次S X01－ 11・ 12間土層（東から）
- 図版 7 10次S A01・ S B01全景（南東から）
- 図版 8 (1) 10次S B01柱穴検出状況（北から）
(2) 10次S B01の規模（南東から）
(3) 10次S B01から7次調査地（谷の部分）を望む（西から）
- 図版 9 (1) 10次S X02全景（南から）
(2) 10次S X02土層（南から）
- 図版 10 (1) 10次谷部完掘状況（東から）
(2) 10次S X01調査状況（南東から）
- 図版 11 (1) 11次1区全景（南東から）
(2) 11次S X01全景（北西から）
(3) 11次S X01土層（北から）
- 図版 12 (1) 11次2区全景（北から）
(2) 11次S X02全景（北西から）
- 図版 13 (1) 11次S X03全景（北西から）
(2) 11次S X04全景（南西から）
- 図版 14 (1) 11次S X02B・ C間土層（南から）
(2) 11次S X03土層（北から）
(3) 11次S X04焼土検出状況（北から）
- 図版 15 (1) 11次1号窯跡検出状況（北から）

	(2) 11次1号窯跡完掘状況（北から）
図版16	(1) 11次1号窯跡煙道部全景（北から）
	(2) 11次1号窯跡煙道部断ち割り（北から）
	(3) 11次1号窯跡排煙口全景（東から）
図版17	(1) 11次1号窯跡焚口～焼成部縦断面土層（東から）
	(2) 11次1号窯跡焼成部横断土層（北から）
	(3) 11次1号窯跡前庭部土坑土層（東から）
図版18	10・11次調査地調査前状況（北東から）
図版19	10次調査出土遺物①
図版20	10次調査出土遺物②
図版21	11次調査出土遺物
図版22	10・11次調査出土須恵器ヘラ記号

挿 図 目 次

第1図	平成15年度上大利北土地区画整理地内調査地および10・11次調査地位置図（1／5,000）…	2
第2図	上大利土地区画整理地周辺旧地形測量図（1948年米軍撮影）（1／5,000）…	3
第3図	上大利土地区画整理事業地内計画平面図…	4
第4図	周辺遺跡分布図（1／50,000）…	5～6
第5図	10次S X01土層実測図①（1／60）…	10
第6図	10次調査地全体図（1／400）…	11～12
第7図	10次S X01土層実測図②（1／60）…	13
第8図	10次S X01土層実測図③（1／60）…	14
第9図	10次S X01・S B01出土遺物実測図（1／3）…	15
第10図	10次S A01実測図（1／60）…	16
第11図	10次S B01実測図（1／60）…	18
第12図	10次S X02実測図（1／40）…	19
第13図	10次谷部上層出土遺物実測図（1／3）…	20
第14図	10次谷部下層出土遺物実測図（1／3）…	21
第15図	10次表採遺物実測図（1／3）…	22
第16図	11次調査地全体図（1／400）…	23
第17図	11次S X01実測図（1／60）…	24
第18図	11次S X02・03・04実測図（1／60）…	25
第19図	11次1号窯跡実測図（1／40）…	28
第20図	11次1号窯跡前庭部土坑実測図（1／60）…	29
第21図	11次調査地出土遺物実測図（64・67・68は1／2、その他は1／3）…	30

表 目 次

表 1	本堂遺跡10次調査出土遺物観察表①	32
表 2	本堂遺跡10次調査出土遺物観察表②	33
表 3	本堂遺跡10次調査出土遺物観察表③	34
表 4	本堂遺跡11次調査出土遺物観察表	35

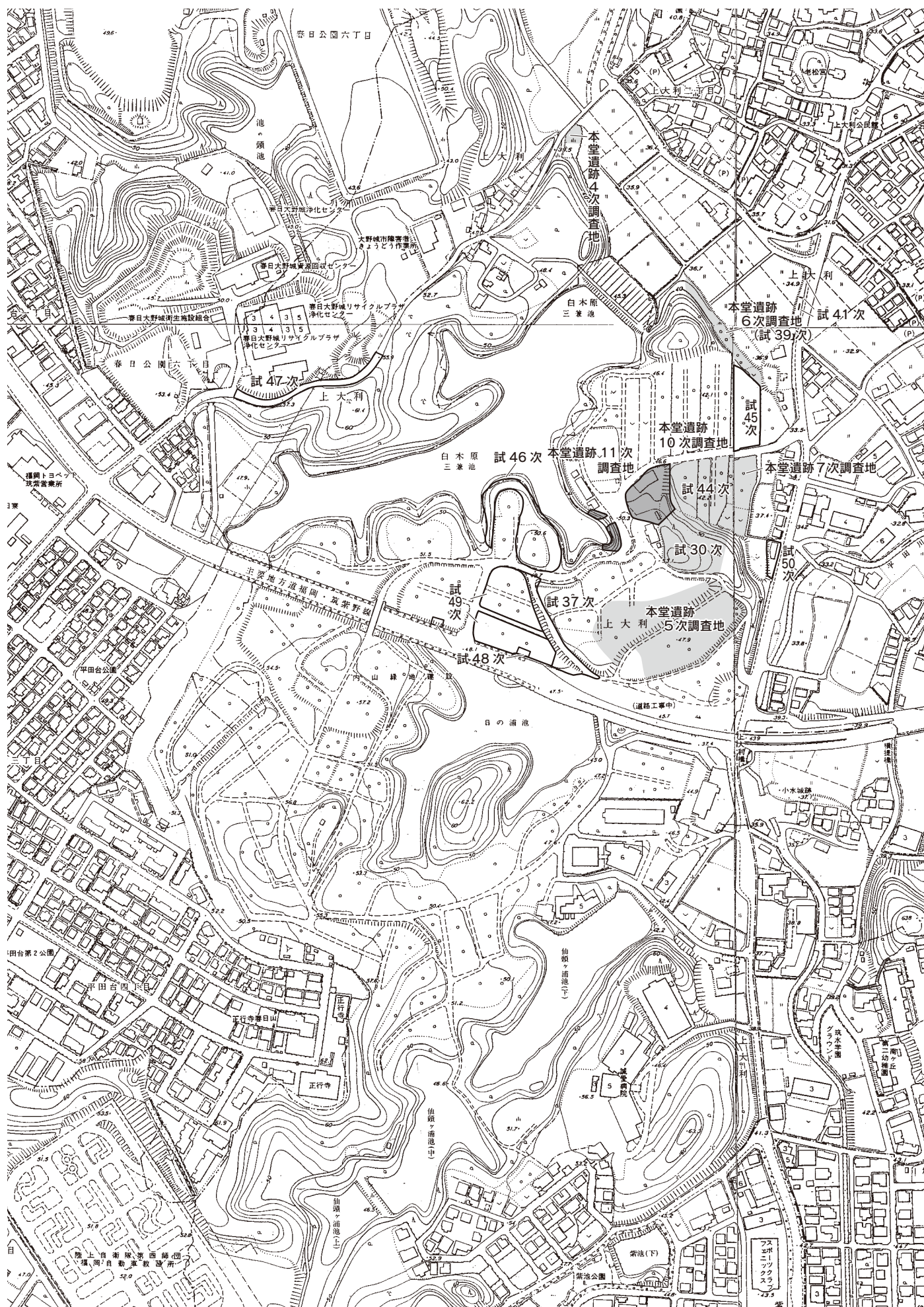
I. はじめに

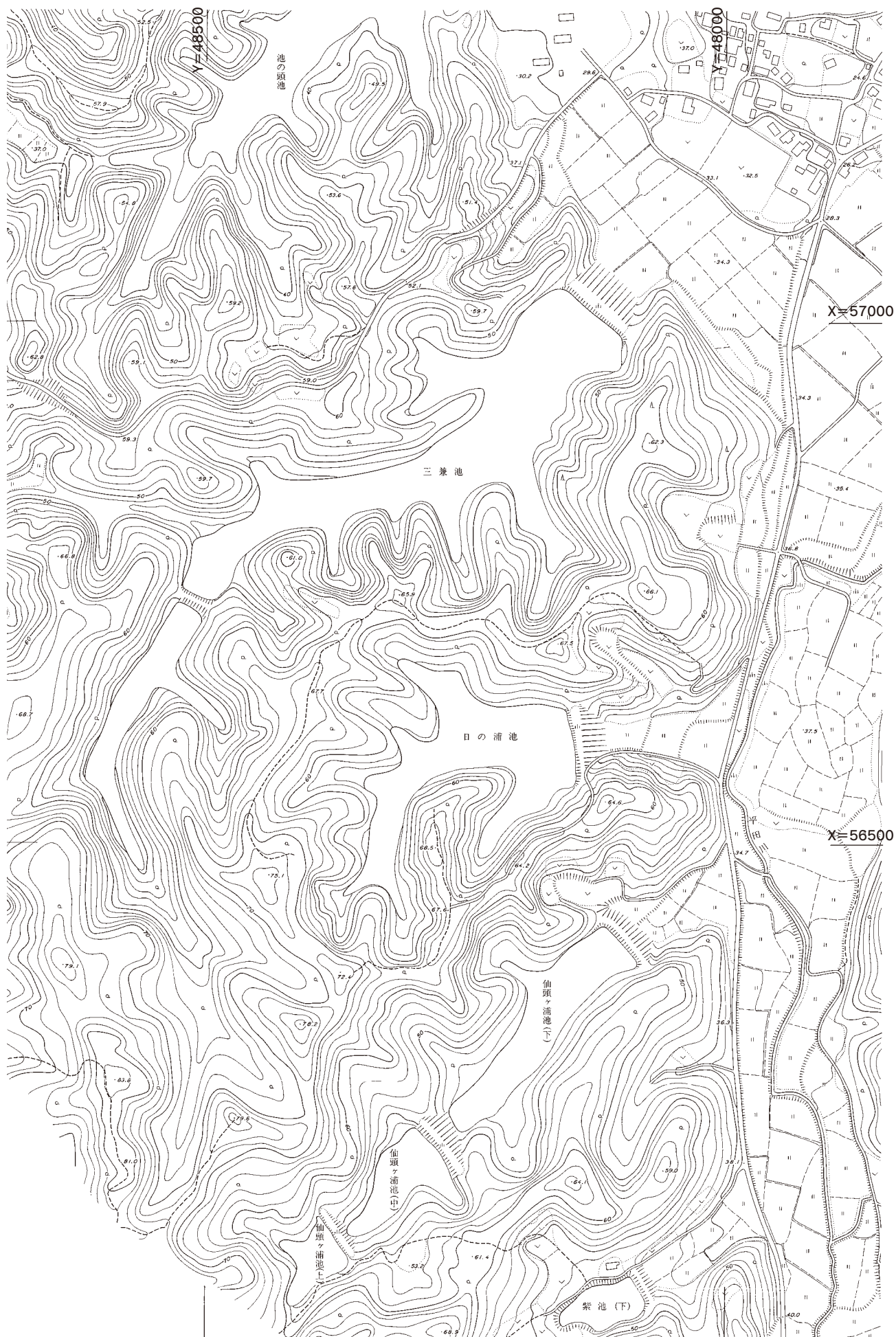
1. 平成15年度の調査経過

上大利北土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財の調査経緯については『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第60集）に詳述しているため、以下では平成15年度の埋蔵文化財調査についてまとめておきたい。

平成15年度、上大利北土地地区画事業地内における埋蔵文化財調査としては、試掘調査を11ヶ所（30・37・39・41・44・45・46・47・48・49・50次）実施した。試掘調査の方法は、一部トレンチ調査により遺構の有無や削平状況を確認した場所もあるが、基本的には対象となった試掘調査地全体を重機により表土剥ぎを実施している。以下に、試掘調査の概要について記す。

30次試掘調査は、平成14年度より引き続き実施したもので、山の斜面すべて表土剥ぎをおこなった。その結果、斜面部には洞窟壕と思われる落ち込みがある他、遺構は確認できなかったが、後述する44次試掘調査との間に谷部を検出した。谷部からは大量の遺物が出土している。37次試掘調査は、三兼池側から県道31号線方向へむかう内山緑地の作業用道路部分にあたり、部分的にトレンチを入れて遺構の検出にあたった。その結果、道路部分の大半はすでに切土されていることが判明したが、北側の一部では谷部を検出した。谷部は三兼池へむかつてのびると考えられたが、作業用道路があり、全掘できなかった。遺構・遺物の検出はなかった。39次試掘調査は本堂遺跡3次調査地の北側緩斜面にあたり、元々畑であったが、工事中は仮設道路となった部分にあたる。表土剥ぎの結果、竪穴住居跡・土坑が検出された。41次試掘調査は、下大利・南ヶ丘線と本堂遺跡2次調査地の間の空き地にトレンチを設定し、掘り下げをおこなった。その結果、道路へむかつて下がる地山が確認され、遺構・遺物は確認されなかった。この調査により、現況では道路面より2m高い本堂遺跡2次調査地側が低丘陵にあたり、この比高差がある程度旧状を保っていたことが判明した。44次試掘調査は、30次試掘調査地の北側にあたる。階段状に造成がおこなわれ、植林地として利用されていたため遺構はほとんど存在しないものと考え、当初はトレンチ調査から開始したが、30次試掘調査地との間に東へむかう谷部を確認した。この谷部は、平成13年度に実施した本堂遺跡1次調査地においても確認されており、両者は一連のものと判断されたことから、谷部の掘り下げをおこなうとともに造成部分も全面表土剥ぎを実施し、遺構の検出につとめた。結果、谷部からはおびただしい遺物が出土し、造成部分からも掘立柱建物・竪穴住居跡などの遺構が検出された。45次試掘調査は、44次試掘調査地の北側にあたる。44次と同様に、階段状に造成がおこなわれ、遺構はすでに削平されたかと思われたが、調査地の大半で溝・ピットが検出された。46次試掘調査は、37次試掘調査地の北側にあたる。三兼池にむかつて突出する丘陵であったが、調査時には上半部はすでに削平されていた。したがって、残された斜面部分のうち削平される上半部分の表土剥ぎをおこなったが、遺構・遺物は確認できなかった。47次試掘調査は、リサイクルプラザ南側の道路部分にあたる。調査地の斜面下方は梅頭遺跡2次調査地であり、斜面に掘り込まれた遺構から大量の遺物が出土していたことから、遺構の存在を想定しトレンチ7本を設定した。いずれのトレンチも現地表面から20～40cmで地山を検出したが、遺構・遺物は確認できなかった。48次試

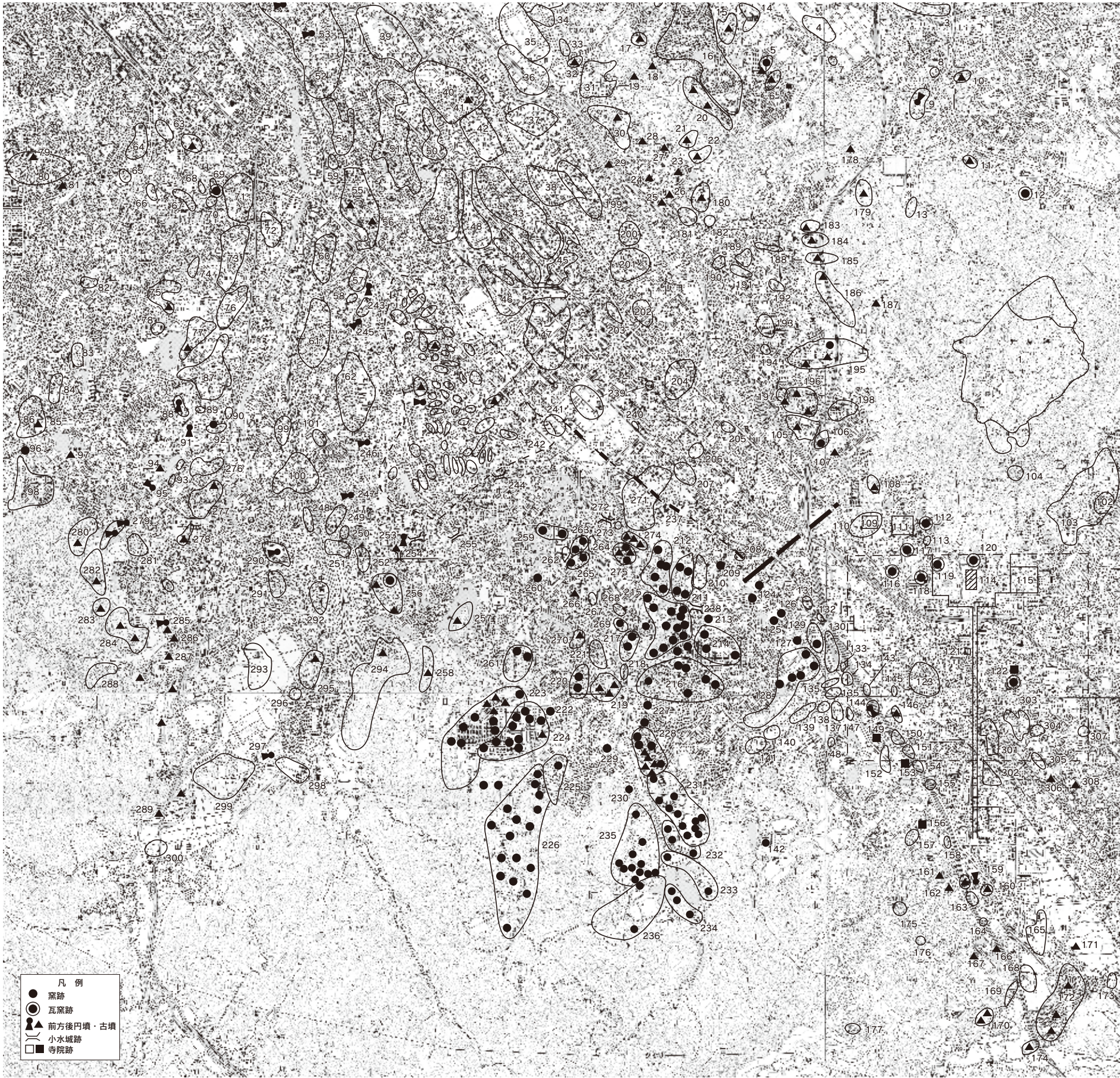




第2図 上大利土地区画整理地周辺旧地形測量図（1948年米軍撮影）（1／5,000）



第3図 上大利土地区画整理事業地内計画平面図



第4図 周辺遺跡分布図 (1／50,000)

1. 大野城跡	77. 野多目B遺跡・古墳群	154. 塔原遺跡	225. 大谷窯跡群
2. 水城跡	78. 野多目浦ノ池遺跡	155. 樋田山遺跡	226. 石坂窯跡群
宇美町	79. 穴観音古墳	156. 武蔵寺跡	227. 東浦窯跡
3. 神領・浦尻古墳群	80. 寺塚A古墳群	157. 武蔵寺経塚群	228. 中通遺跡群・古墳群
4. 川原田・供田遺跡群	81. 寺塚B古墳群	158. 道場山遺跡	229. 城ノ山窯跡群
5. 岩長浦古墳群	82. 屋形原遺跡	159. 原口古墳・古墳群	230. 原窯跡
6. 観音浦古墳群	83. 花畑C遺跡群	160. 鷺田山遺跡・古墳群	231. ハセムシ窯跡群
7. ウソフキ古墳	84. 花畑B遺跡群	161. 八限裏山古墳	232. 道ノ下窯跡群
8. 宇美中学校遺跡	85. 花畑A遺跡群	162. 八限古墳群	233. 長者原窯跡群
9. 正籠古墳群	86. 三十田古墳	163. 畑添遺跡	234. 笹原窯跡群
10. 湯湧古墳群	87. 野多目C遺跡群	164. 山の口遺跡	235. 井手窯跡群
11. 花ノ木古墳群	88. 卯内尺古墳・古墳群	165. 立明寺地区遺跡	236. 足洗川窯跡群
12. 寺浦窯跡	89. 老司B遺跡	166. 扇祇古墳群	237. 池田・池の上遺跡
13. 内野谷古墳群	90. 老司B遺跡	167. 江永浦古墳	238. 上大利水城跡
志免町	91. 老司古墳	168. 貝元遺跡	春日市
14. 松ヶ上・松ヶ下遺跡	92. 老松神社古墳群	169. トドキ遺跡	239. 駿河遺跡
15. 松ノ尾古墳群	93. 老司池A・B遺跡群	170. 古賀古墳群	240. 原ノ口遺跡
16. 板ヶ丘古墳群	94. 中尾古墳	171. 蔵島神社古墳	241. 立石遺跡
福岡市	95. 浦ノ田古墳群	172. 上の山古墳群	242. 須玖・岡本遺跡群
17. 熊野古墳群	96. 中島窯跡	173. 大牟田西遺跡	243. 御陵遺跡群・古墳
18. 七曲古墳群	97. 箱池古墳	174. 萩原古墳群	244. 小倉水城跡
19. 金剛山古墳群	98. 四十塚・大牟田古墳群	175. 天判山城	245. 野藤1号墳
20. 持田ヶ浦古墳群A群	99. 警弥郷A遺跡	176. 飯盛城跡	246. 下白水大塚古墳
21. 持田ヶ浦古墳群B群	100. 警弥郷B遺跡	177. 博多見城跡	247. 日拝塚古墳
22. 持田ヶ浦古墳群C群	101. 弥永遺跡群	301. 二日市宿跡	248. 柏田遺跡
23. 持田ヶ浦古墳群D群	太宰府市	302. 堀池遺跡	249. 辻田遺跡
24. 持田ヶ浦古墳群E群	102. 浦城跡	303. 峯畑遺跡	250. 上白水西遺跡
25. 持田ヶ浦古墳群F群	103. 原遺跡	304. 修理田遺跡	251. 門田遺跡
26. 今里不動古墳	104. 岩屋城跡	305. 通ノ浦遺跡	252. 天神の木遺跡
27. 堤ヶ浦古墳群	105. 成屋形古墳群	307. 五穀神古墳	253. 天神山古墳
28. 影ヶ浦古墳群	106. 裏ノ田遺跡	308. カケ塚古墳	254. 天神山水城跡
29. 丸山古墳	107. 裏ノ田古墳		255. 大土居水城跡
30. 金隈遺跡群	108. 陣の尾古墳群・遺跡群		256. ウトグチ遺跡群
31. 立花寺遺跡群	109. 筑前国分尼寺跡		257. 白水池古墳群
32. 文殊谷古墳群	110. 国分松本遺跡		258. 西浦古墳群
33. 上月隈B遺跡	111. 筑前国分寺跡		259. 惣利窯跡群
34. 上月隈遺跡群	112. 国分瓦窯跡		260. 大牟田窯跡
35. 下月隈C遺跡群	113. 御笠国印出土地		261. 浦ノ原窯跡群
36. 立花寺B遺跡群	114. 大宰府政庁跡		262. 惣利西遺跡
37. 井相田D遺跡群	115. 観世音寺		263. 惣利遺跡
38. 井相田C遺跡	116. 松倉瓦窯跡		264. 惣利北遺跡
39. 那珂君休遺跡群	117. 坂本瓦窯跡		265. 惣利東遺跡
40. 板付遺跡	118. 米木古墳群・瓦窯跡		266. 惣利古墳
41. 板付八幡古墳	119. 米木北瓦窯跡		267. 円入遺跡
42. 高畑遺跡	120. 都府楼北瓦窯跡		268. 春日平田遺跡群
43. 麦野A遺跡	121. 榎寺		269. 春日平田西遺跡
44. 麦野B遺跡	122. 般若寺・瓦窯跡		270. 塚原古墳群
45. 麦野C遺跡	123. 市ノ上遺跡		271. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群
46. 南八幡遺跡群	124. 神ノ前窯跡群		272. 春日水城跡
47. 雑餉隈遺跡群	125. 篠根遺跡・窯跡		273. 向谷北遺跡
48. 三筑遺跡	126. 専田窯跡		274. 向谷古墳群
49. 笹原遺跡群	127. 長浦窯跡		275. 春日平田北遺跡
50. 諸岡B遺跡	128. 宮ノ本遺跡群・窯跡群		那珂川町
51. 諸岡A遺跡	129. 日焼遺跡群・窯跡群		276. 野口遺跡群
52. 比恵・那珂遺跡群	130. 前田遺跡		277. 観音堂遺跡群
53. 那珂八幡古墳	131. 原口遺跡		278. 井河古墳群
54. 五十川遺跡群	132. 久那利遺跡		279. 小丸古墳群
55. 井尻B遺跡	133. 上川久保遺跡		280. 浦ノ原古墳群
56. 井尻B-1号古墳	134. 難川遺跡		281. 井河遺跡群
57. 寺島遺跡	135. フケ遺跡		282. 丸ノ口古墳群
58. 笠拔遺跡	136. 尾崎遺跡		283. 白石古墳群
59. 井尻A遺跡	137. 脇道遺跡		284. 荒平池古墳群
60. 横手遺跡群	138. 殿城戸遺跡		285. 妙法寺古墳
61. 日佐遺跡群	139. 京ノ尾遺跡		286. 油田古墳群
62. 弥永原遺跡群	140. カヤノ遺跡		287. 大万寺前古墳
63. 野間A・B遺跡	141. 長ヶ坪遺跡		288. 国太子古墳群
64. 中村町遺跡	142. 野口窯跡		289. 松尾古墳群
65. 若久A遺跡	筑紫野市		290. 今光宗石遺跡群・貝徳寺古墳
66. 若久B遺跡	143. 井ノ尻遺跡・古墳		291. 松ノ木遺跡群
67. 大橋B遺跡	144. 剣塚遺跡・古墳群・瓦窯跡		292. 中原・塔ノ元遺跡群
68. 大橋C遺跡	145. 杉塚大坪遺跡		293. 仲遺跡群
69. 大橋D遺跡・三宅瓦窯跡	146. 埴安神社古墳		294. 観音山古墳群・深原遺跡
70. 三宅A遺跡・三宅廃寺	147. 和久堂城跡		295. エゲ古墳・カクチガ浦古墳群
71. 大橋E遺跡	148. 杉塚山の谷遺跡		296. 炭焼古墳群
72. 三宅C遺跡	149. 杉塚廃寺		297. 安徳大塚古墳
73. 三宅B遺跡	150. 唐人塚遺跡・古墳群		298. 平蔵遺跡群
74. 和田A遺跡群	151. 前田遺跡		299. 安徳台遺跡群
75. 和田B遺跡群	152. 脇田遺跡		300. 山田西遺跡群
76. 野多目A遺跡	153. 塔原廃寺		

掘調査は、下水マスの設定に合わせて県道31号線沿いの2ヵ所をトレンチ調査した。現地表面下60cmで地山を確認したが、遺構・遺物は認められなかった。49次試掘調査地は、37次試掘調査地の西側にあたる。当初から大きく削平されることが予想されたため、トレンチを設定した所現地表面下30～120cmで地山を検出した。調査区西側では三兼池にむかつてのびる谷部を検出したが、遺構・遺物は確認できなかった。50次試掘調査は、下大利・南ヶ丘線と本堂遺跡1次調査の間の空き地にトレンチを設定した。しかし、まったく遺構面は検出されず、遺物の出土もなかった。

以上のように、平成15年度実施した11ヵ所の試掘調査地のうち、30・39・44・45次調査において遺構が確認できた。

平成15年度の発掘調査は、本市は平成14年度に試掘調査を実施した8・10・14次試掘調査を本堂遺跡5次調査（註1）、33次試掘調査の一部を本堂遺跡4次調査、平成15年度に試掘調査を実施した39次試掘調査を本堂遺跡6次調査、30・44次試掘調査を本堂遺跡7次調査として実施した。

また当時、上大利南土地区画整理事業も並行して実施していたため、本堂遺跡5次調査のうち窯跡が集中する部分を大阪大谷大学（当時大谷女子大学）中村浩教授に調査を依頼した。本市ならびに大学の調査期間・面積等については下の表のとおりである。

	遺跡名	試掘調査回数	試掘調査期間	発掘調査期間	調査面積（㎡）	担当
平成15年度発掘調査	本堂遺跡4次調査	33次	平成15年1月11日～22日	平成15年5月22日～6月5日	670	石木
	本堂遺跡5次調査	8・10・14次	平成13年11月16日～平成16年1月6日	平成15年7月10日～平成16年3月31日	15,000	中村 石木
	本堂遺跡6次調査	39次	平成15年7月12日～25日	平成15年8月10日～10月7日	1,400	石木
	本堂遺跡7次調査	30・44次	平成15年6月24日～平成16年1月17日	平成16年2月17日～平成17年1月31日	6,500	石木 岸見

なお、45次試掘調査は本堂遺跡8次調査として平成16年度に発掘調査を実施した。

2. 調査体制

平成14～19年度における発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。なお、整理作業は平成19年度に完了した。

[大野城市教育委員会]

教育長	堀内貞夫（～15年6月） 古賀宮太（15年6月～）
教育部長	鬼塚春光（14年3月～17年3月） 小嶋 健（17年4月～）
社会教育課長	秋吉正一（14年4月～17年3月） 水野邦夫（17年4月～18年3月）
ふるさと文化財課長	舟山良一（18年4月～）
文化財担当係長	舟山良一（～18年3月） 中山 宏（18年4月～）
主 査	徳本洋一 石木秀啓 緒方一幹（16年4月～18年3月） 丸尾博恵

主任主事 大道和貴（～16年3月）
 主任技師 林 潤也 早瀬 賢（16年4月～）
 技 師 上田龍児（平成19年4月～）
 嘱 託 平島義孝（～16年3月） 上田 恵（14年4月～15年4月） 島田 拓（14年4月～15年6月） 岸見泰宏（14年4月～16年3月） 一瀬 智（15年11月～17年7月） 西堂将夫（15年4月～18年3月） 井上愛子（16年4月～） 北川貴洋（16年4月～19年3月） 城門義廣（18年4月～19年8月） 岡田裕之（18年5月～19年3月） 田尻義了（19年4月～6月） 遠藤 茜（19年4月～） 石川 健（19年7月～） 栗津剛史（16年4月～18年6月） 能塚由紀（18年8月～）
 整理作業員 松岡信子 町井裕子 鬼塚穂子 白井典子 村山律子 井上理香 渡部美香 城真奈美 橋本悦子 渡辺直美 仲村美幸

発掘作業員

原田敬子 大海雅子 高木幸子 満富スエコ 吉嗣波津子 岩切ふえ 前田チエ子 西田幸子
 那波幸子 高木冴子 藤田和子 三原ひろみ 吉田香織 岡本妙子 馬場孝子 田中照子
 寺垣みゆき 中垣 親 松山洋子 日野律子 小林敏子 坂本泰子 渡辺久美子 小林久美子
 西村清子 貞包由起子 広渡隆子 穴井和子 立石律子 船越桃子 樋之口浩一 深野人美
 大藺英美 仲前富美子 井口るみ子 倉富倫子 釣屋種利 飯田三治 溝口 忍 金澤好子
 田浦秀子 小川ケイ子 三善公子 山下隆子 團野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子
 中山文子 牧野和美 川村真樹子 村岡真由美 榎坂陽子 原口美奈子 山口文代
 大島五津子 大浦旗江 清成健悟 高木由佳 木村奈津子 織田 徹 松田和美 戸渡京子
 野崎美智子 倉住孝枝 稲富久子 山田賢治 松尾純子 末永 勝 安達はるみ 西本福雄
 田中悦子 田野和代 吉村秀子 宮原ゆかり 尾ノ口英晴 碓井ふき子 木室友希 川岸昌子

[上大利北土地区画整理組合]

理事長	伊 藤 雅 都
副理事長	樋 口 敬 記
	林 尚 司
事務局長	平 川 松 丸
技術職	吉 次 俊 二（～19年3月）
	林 圭 一（～18年3月）
	山 下 健（16年4月～）
	濱 本 泰 司（18年4月～）
事務職	伊 藤 衆 子

註1 報告書既刊。中村浩2004『牛頸本堂遺跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第64集

中村浩・石木秀啓2005『牛頸本堂遺跡群Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第68集

II. 調査の結果

1. 第10次調査

A. 調査概要（第6図・図版1）

第10次調査地は、三兼池東側、大野城市大字上大利657番地ほかにあたり、調査面積は1,750㎡である。調査地は内山緑地の社屋北側にあたり、石垣を築くなど旧地形を相当改変していることが現況から判断できた。昭和23年段階の旧地形図で見ると、調査地周辺は東に向かって大きく開く谷部と、南北に蛇行しながらのびる広い平坦面をもつ尾根部が確認できる。

試掘調査は平成16年11月5日から12月13日の間におこなった。調査は設置されていた石垣を除去し、表土剥ぎを開始した。その結果、調査地に隣接する作業用道路は地山を削平して造成されており、調査地内は道路から下がる斜面が検出された。斜面は既に調査を終了していた本堂遺跡7次調査地へ続いており、7・10次調査地が旧地形図に見える大きな谷部にあたることが判明した。10次調査地は谷奥部の斜面にあたり、上方の尾根部平坦面は作業用道路として利用されたため相当の削平を受けていた。

このように、調査地内では斜面を検出した。調査開始時点、斜面上に大きな土坑状の遺構（SX01）が認められたが、他に目立った遺構は確認できないと判断し、7次調査地から続く谷奥部の遺物堆積層の掘り下げを優先して実施した。谷奥部は湧水により掘り下げは困難であったが、作業はおおむね順調に進んだ。その後SX01の掘り下げを開始したが、SX01は土坑状とならず斜面をL字状に切土したような掘方を呈し、土層断面において認められる水平な堆積層が再度の遺構検出により斜面を鉢巻状に取り巻くこと、その下層から炭化材が出土することが明らかとなった。このことから単なる斜面と見えた調査地内の地形は、斜面をL字状に切土した遺構が存在すると判断され、斜面全面の掘り下げをおこなった。掘り下げにあたっては、時間的制約上重機を用いた部分もある。発掘調査は平成16年12月8日から平成17年1月28日の間におこなった。調査は、石木秀啓・井上愛子が担当した。

調査の結果、SX01は斜面をL字状に切土し通路状としており、谷奥部を鉢巻状に取り巻いている。通路は北側が大きく開けるのに対し、南側は狭く閉塞していることから、北側→南側への移動経路が想定される。通路上の遺構としては、南側で通路を遮断するような柵列とその奥に2×3間の掘立柱建物が検出されたが、その他は土坑・溝が確認できる程度で通路を塞ぐような大型の遺構は確認されなかった。

出土遺物は、谷奥部からは須恵器が多く、6～7世紀代のものを主体とするのに対し、SX01からは12世紀前後の土師器が大半で、その他白磁・石鍋等が若干混じる。また、SX01は谷部入口から続くと考えられるが、すでに調査区より東側は完全に削平されており、痕跡を止めないことから不明である。

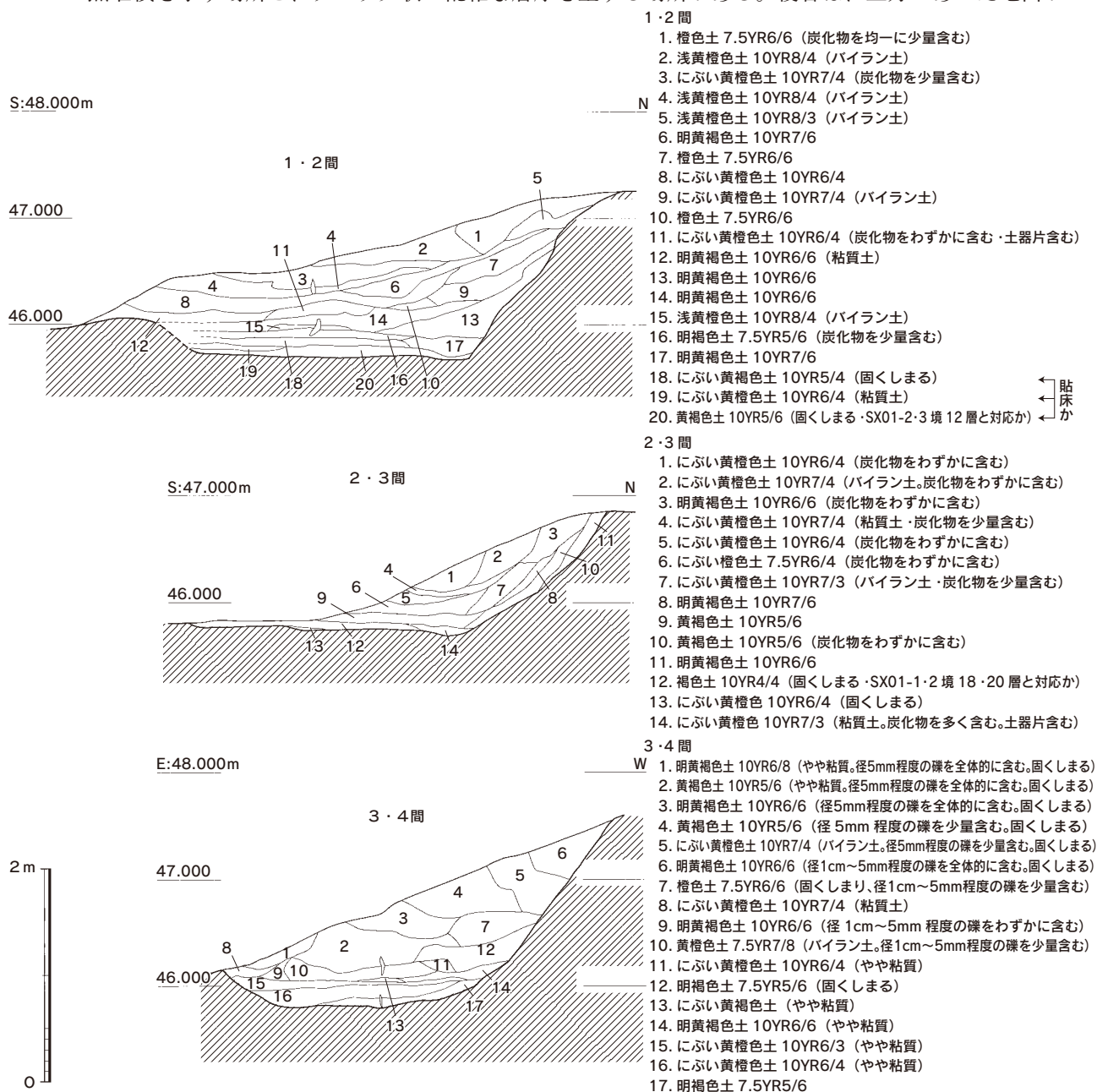
（石木）

B. 遺構と遺物

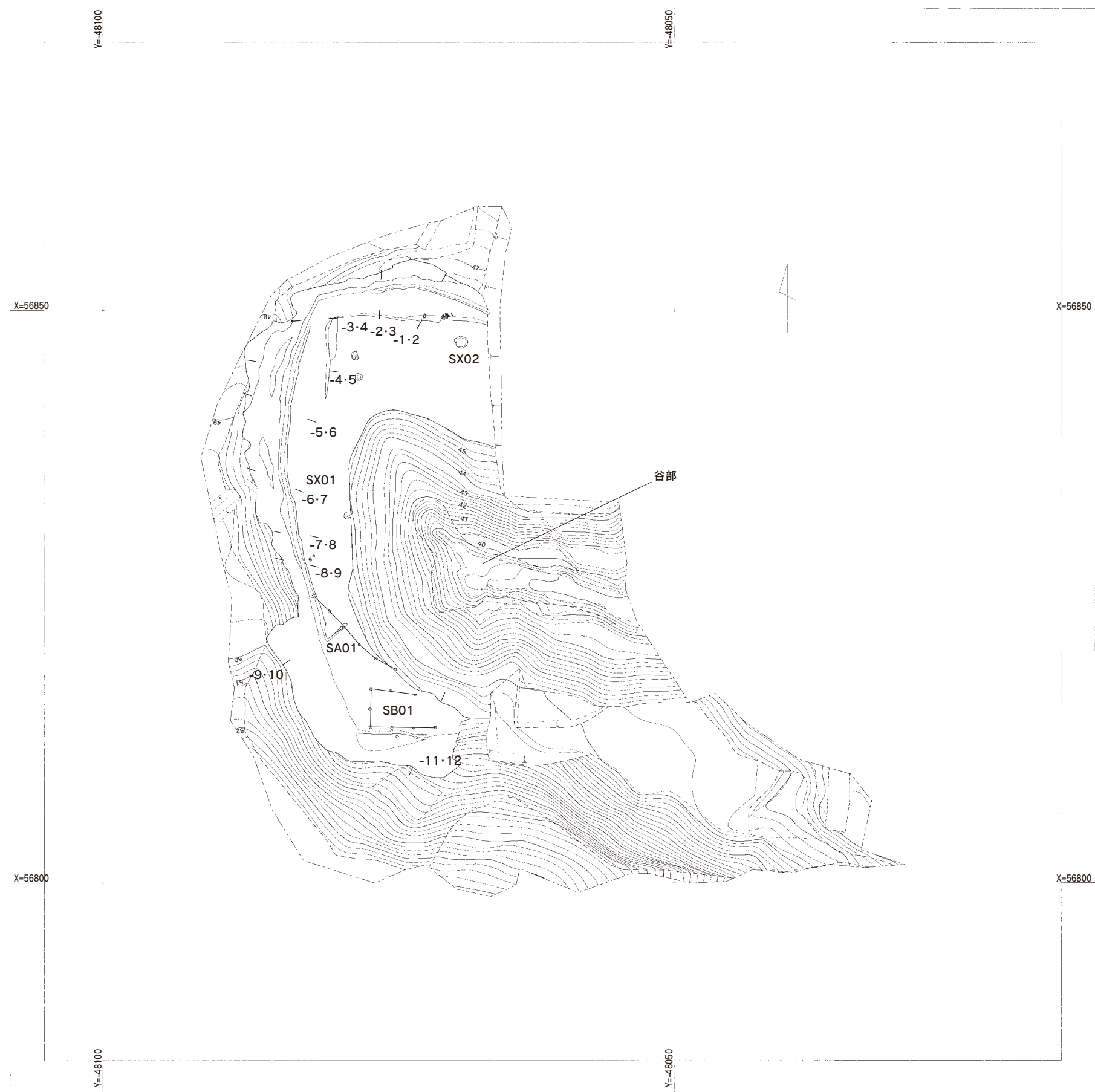
(1) 通路状遺構

SX01 (第5～9図・図版2～6)

調査区を逆コの字形に巡る。斜面をL字状に切土し、通路状の平坦面を造成している。平坦面の広さは北側が最も広く12mほどであるのに対し、SA01辺りで最も狭い所では3.5mとなる。また、平坦面の北側と西側の一部は幅1.4～3.2m、深さ20～50cmほどL字状の溝が掘り下げられていた。さらに、溝の平坦面と掘り込み面の境に一部0.7～1.4m、深さ10cmほどの浅い溝を巡らせている。これらの溝と、SA01・SB01・SX02の他は遺構が認められなかった。平坦面南北の比高差は50cm程度で、北側から南側へむかって緩く下がっている。埋土は、床面に近い面は水平堆積を呈し、しまりがあり、炭化材を含む層も確認された。一方、上層は上方から流土が流れ込み自然堆積を示す場所と、ブロック状に乱雑な層序を呈する場所がある。後者は、上方にあった地山が



第5図 10次SX01土層実測図① (1/60)

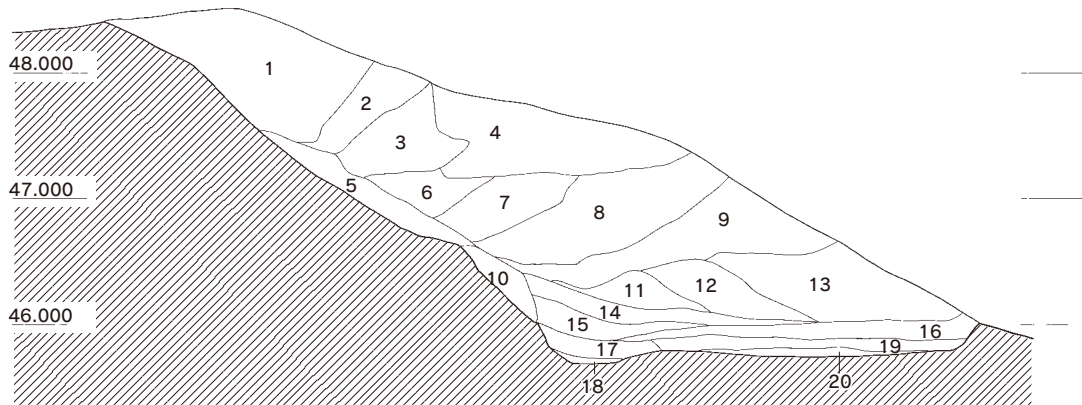


第6図 10次調査地全体図 (1 / 400)

W:49,000m

4・5間

E

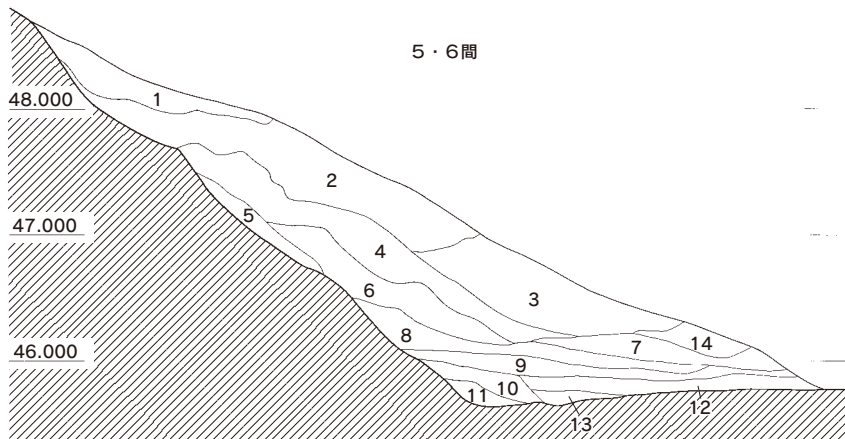


- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 黄橙色土 10YR8/8、灰白色土 10YR8/2 (バイラン土) | 10. 淡黄色土 2.5Y8/4 (バイラン土) 黄褐色土 2.5Y5/4 |
| 2. 明黄褐色土 10YR6/6 | 11. 明黄褐色土 10YR6/6 |
| 3. 明黄褐色土 10YR6/6 | 12. にぶい橙色土 7.5YR7/4 |
| 4. にぶい黄橙色土 10YR6/4 | 13. 明黄褐色土 2.5Y7/6 (バイラン土) |
| 5. にぶい黄褐色土 10YR6/3 | 14. にぶい黄褐色土 10YR5/4 |
| 6. にぶい黄褐色土 10YR6/4 | 15. 褐色土 10YR4/4 |
| 7. 灰白色土 10YR8/1 (バイラン土) | 16. にぶい黄色土 2.5Y6/3 |
| 8. 明黄褐色土 2.5Y7/6 (バイラン土) | 17. にぶい黄褐色土 10YR6/4 (固くしまる) |
| 9. にぶい黄色土 2.5Y6/4 | 18. にぶい黄褐色土 10YR6/4 (シルト) |
| | 19. 黄褐色土 2.5Y5/4 (砂質土) |
| | 20. 明褐色土 7.5YR5/6 |

W:49,000m

E

5・6間

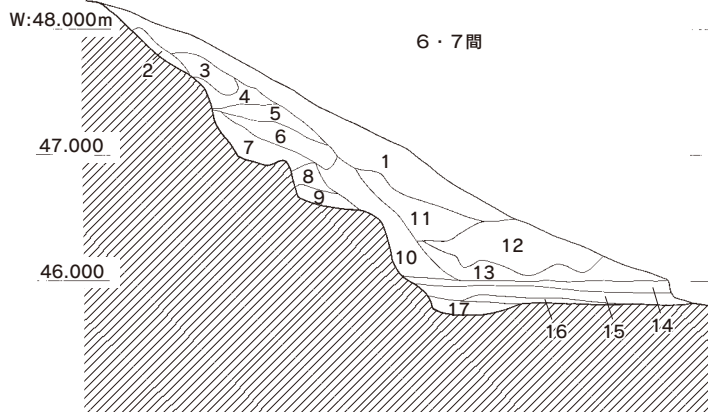


- | | |
|--|---------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色土 10YR6/4 (バイラン土) | 9. にぶい黄褐色土 10YR5/4 (しまりなし) |
| 2. 橙色土 7.5YR6/6 | 10. にぶい黄褐色土 10YR6/4 (粘質土。しまりなし) |
| 3. にぶい黄褐色土 10YR5/4 | 11. 明黄褐色土 10YR6/6 (粘質土。しまりなし) |
| 4. にぶい黄褐色土 10YR5/4 | 12. 明褐色土 7.5YR5/6 (互層となる) |
| 5. 浅黄褐色土 10YR8/3 (バイラン土) | 13. 褐色土 10YR4/6 |
| 6. 橙色土 7.5YR6/6 | 14. 明黄褐色土 10YR6/6 (バイラン土) |
| 7. 明黄褐色土 10YR6/6 (砂質土)、にぶい黄褐色土 10YR6/3 (シルト) | |
| 8. にぶい黄褐色土 10YR5/4 (しまりなし) | |

W:48,000m

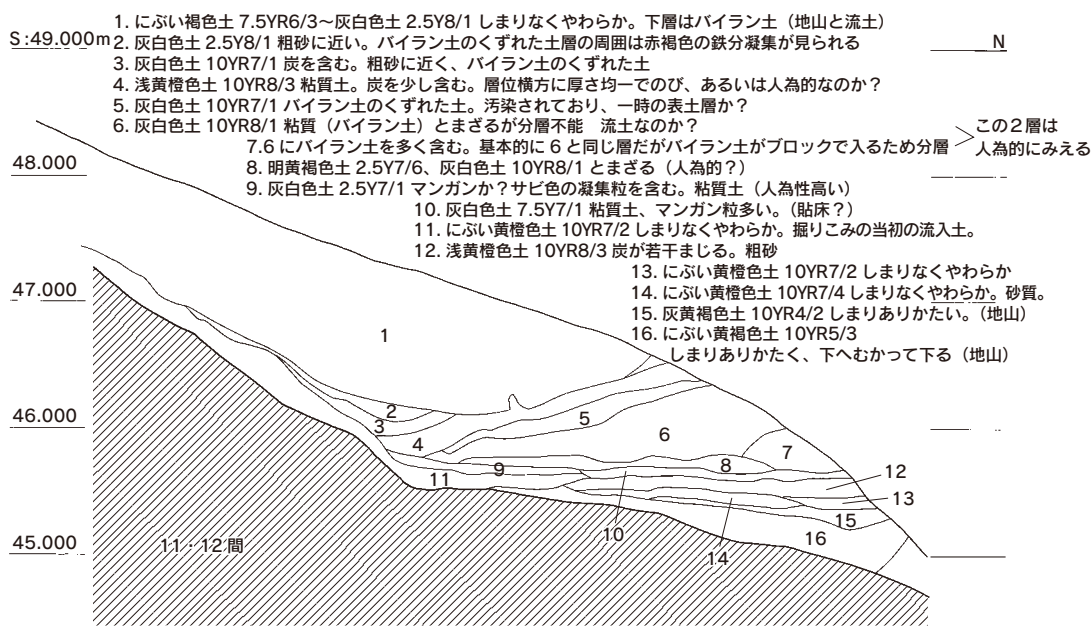
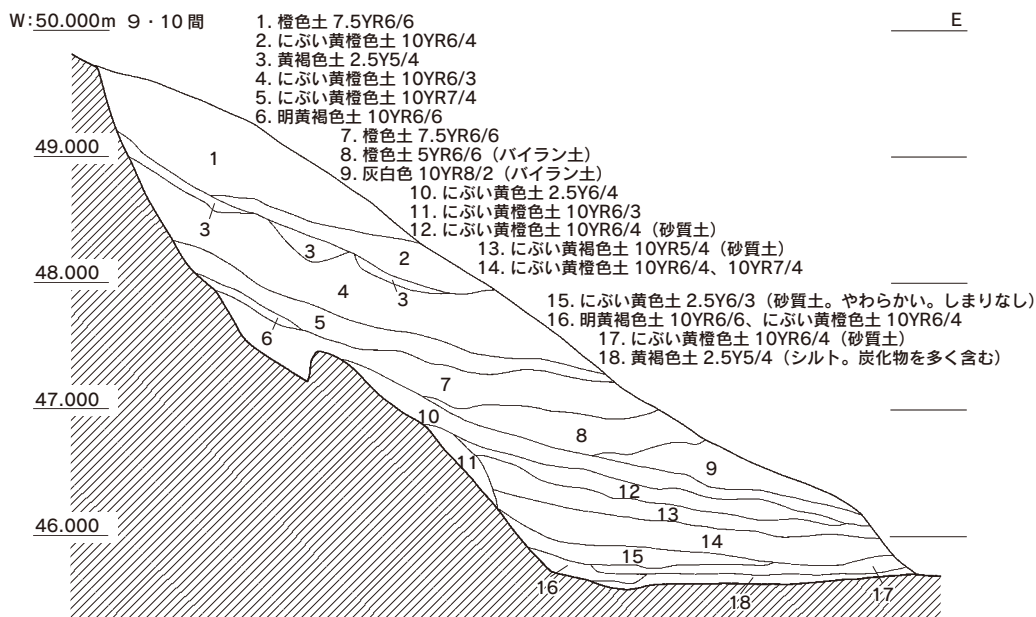
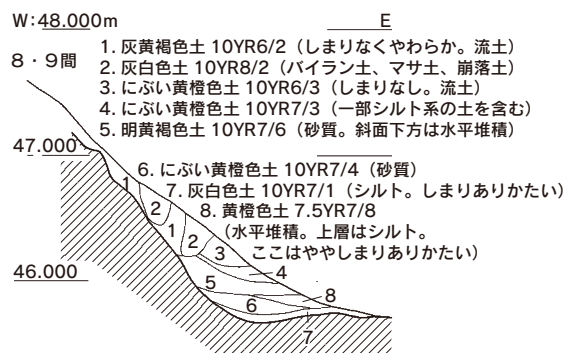
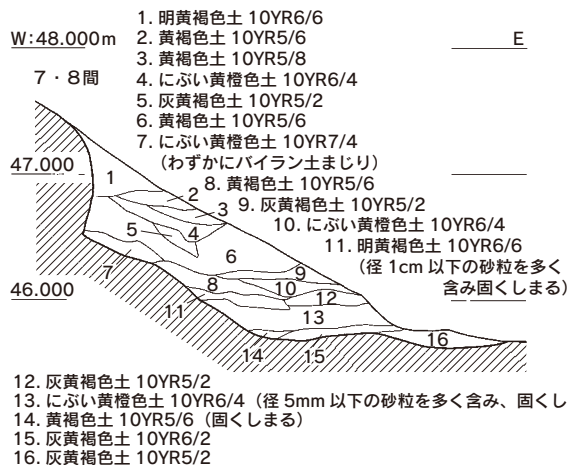
6・7間

E



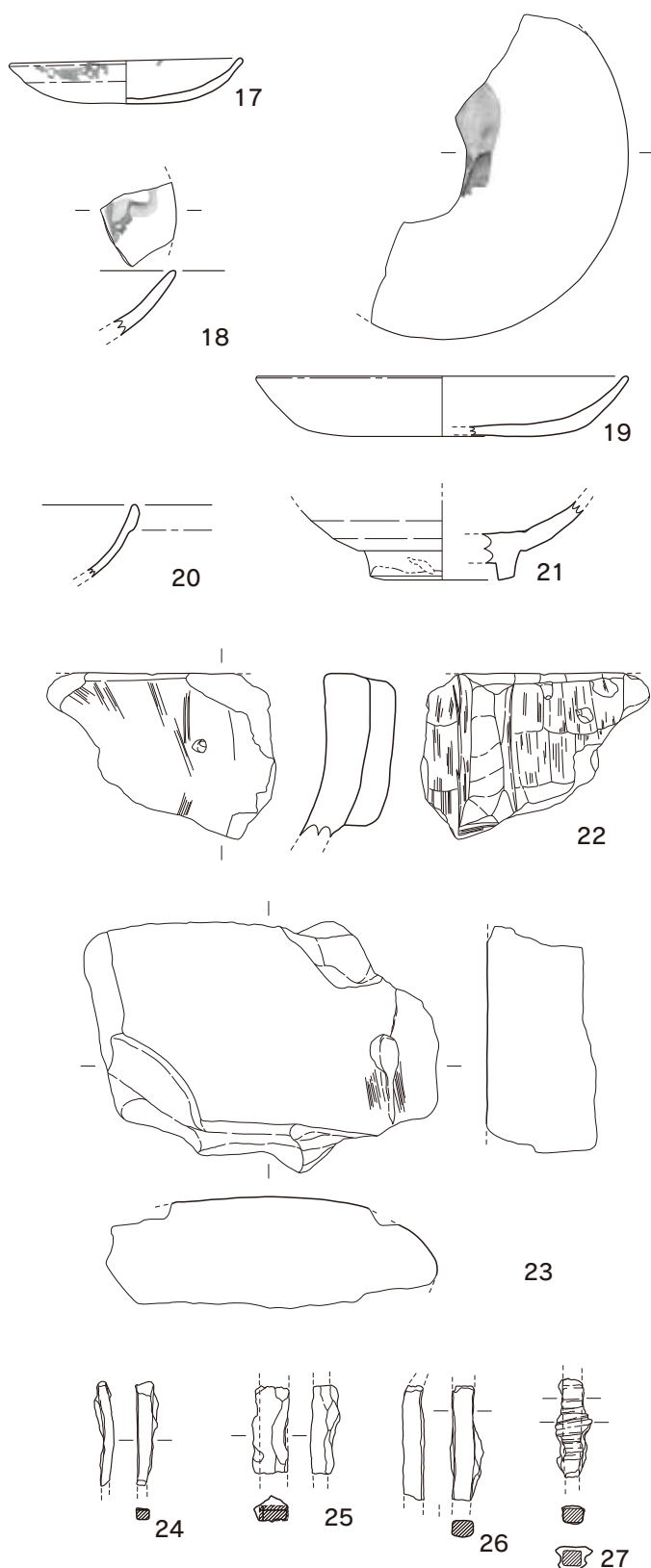
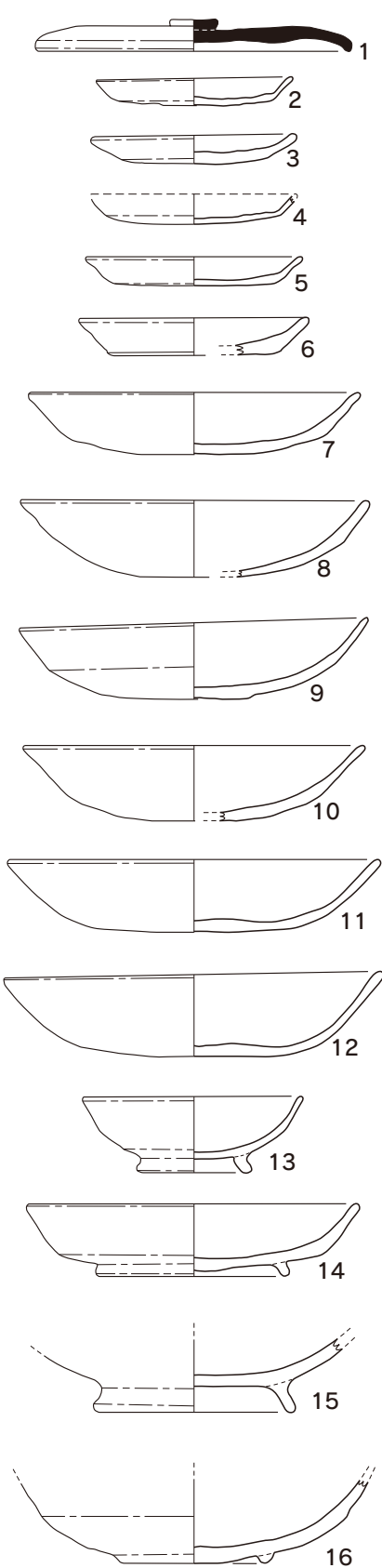
- | |
|---------------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色土 10YR6/4 |
| 2. にぶい黄褐色土 10YR6/3 |
| 3. 明褐色土 7.5YR5/6 |
| 4. にぶい黄褐色土 10YR5/4 |
| 5. 明褐色土 7.5YR5/6 |
| 6. 明褐色土 7.5YR5/6 (炭化物を多く含む) |
| 7. 明褐色土 7.5YR5/6 (炭化物を少し含む) |
| 8. 灰白色土 10YR8/2 (バイラン土) |
| 9. 褐色土 7.5YR4/6 |
| 10. 明褐色土 7.5YR5/6 |
| 11. 明褐色土 7.5YR5/8 |
| 12. 黄褐色土 7.5YR7/8 |
| 13. にぶい黄褐色土 10YR6/4 |
| 14. にぶい黄褐色土 10YR6/3 (砂質土、やわらかい、しまりなし) |
| 15. 黄褐色土 10YR5/6 (固くしまる) |
| 16. にぶい黄褐色土 10YR6/3 (砂質土) |
| 17. 明褐色土 7.5YR5/6 (非常に固くしまる) |

第7図 10次S X01土層実測図② (1 / 60)

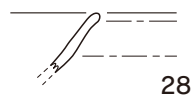


第8図 10次S X01土層実測図③ (1 / 60)

SX01



SB01



0 10cm

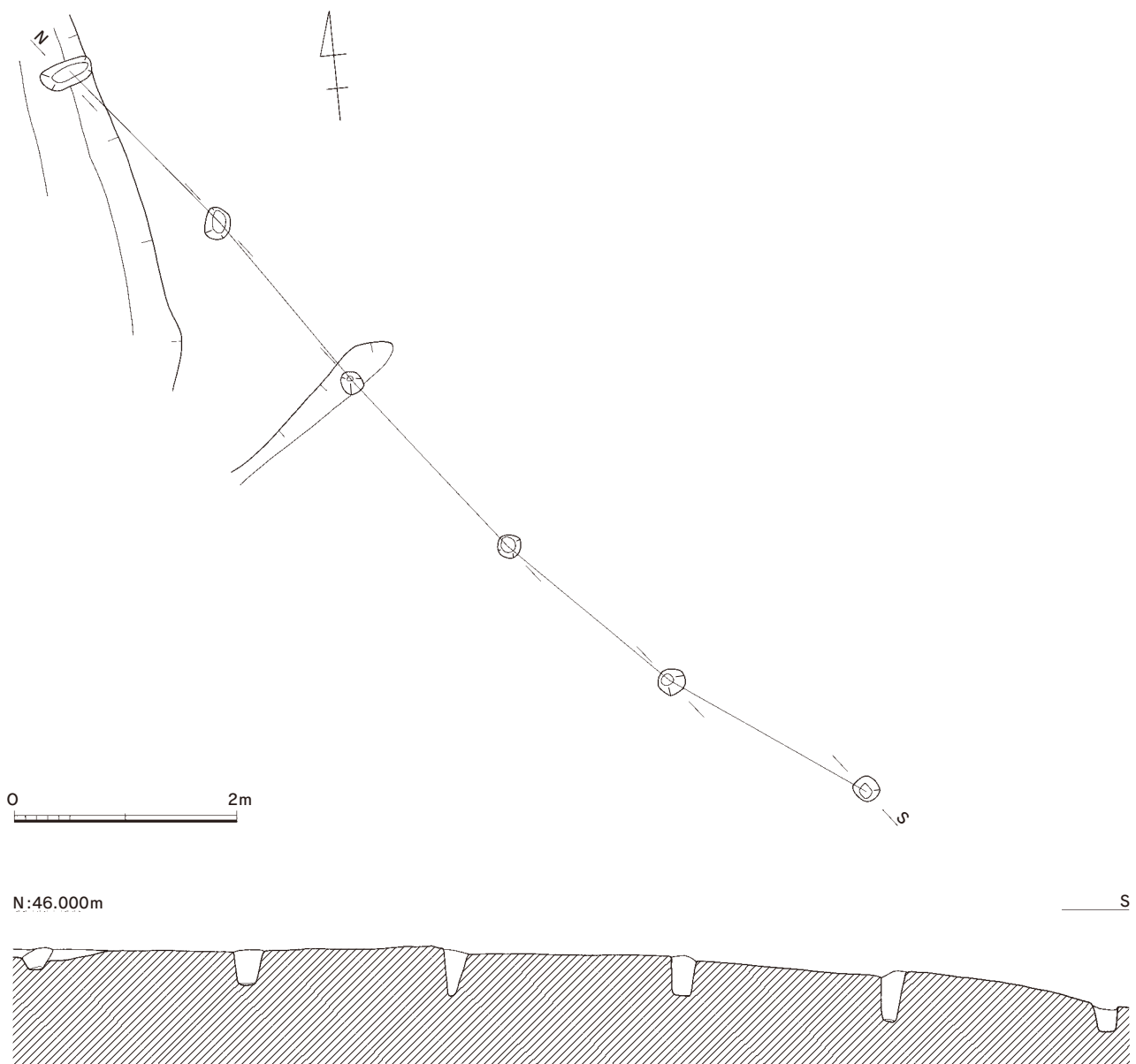
第9図 10次SX01・SB01出土遺物実測図(1/3)

崩壊・堆積したと考えられるが、自然的・人為的のいずれかは判断できない。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・白磁などが出土している。(石木)

出土遺物 (第9図・図版19・20)

須恵器 (1) 杯B蓋である。器高は低く、口縁端部はわずかに立つ程度である。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。

土師器 (2～15・17～19) 2～6は小皿。口径は2～4が8.4～8.8cm、5・6が9.4～9.8cmを測る。底部外面はヘラ切りである。7～12は丸底杯。口径は14.2～16.2cmを測り、7～10は体部外面と底部外面の境にかすかな稜を持ち、10の内面にはコテ当て痕がみられる。11・12は底部外面と体部外面の境の稜は消え、平底化の傾向がみられる。13～15は椀。13は小椀。ヘラ



第10図 10次S A01実測図 (1 / 60)

ミガキはみられない。14は平底に近い。内面コテ当て痕あり。15の高台は高い。17～19は灯明具。17は小皿。丸底で、口縁部にヨコナデを施すため口縁部外面下に稜が生じている。内面から外面にススが付着し、特に口縁部外面はタール状を呈す。18・19は丸底杯。18は灯心の痕跡が明瞭。19は器高が低く、底部は平底化し、内面にススが付着している。

瓦器（16） 碗。体部は丸みを帯び、低い高台をもつ。

白磁（20・21） いずれも碗。20の口縁部は玉縁状で体部は丸みをもち、大宰府分類Ⅱ類か。21は底部片で畳付を斜めに削る。

石製品（22・23） 22は滑石製石鍋。口縁部と耳部が残存する。23は砂岩製。欠損部が多いため、その性格は不明である。

鉄製品（24～27） いずれも釘か？断面は長方形で、27は釘の周りに木質が残存している。（井上）

（2）柵列

SA01（第10図・図版7）

SX01の南側で検出された。径20cm程度のピットが6個、通路部分が最も狭くなった部分を斜行するように配置される。ピット間の距離は、北側から1.9、1.84、2.1、1.88、2.04m。埋土はしまりなく、やわらかい。出土遺物はなかった。なお、柵列の前面には焼土が確認されたが、焼けしまりは弱いものであった。（石木）

（3）掘立柱建物

SB01（第11図・図版7）

調査区の最も南側で確認された。おおむね東西方向に主軸をとり、南北2間（梁行3.30m）、東西3間（桁行5.70m）の規模を有する。西面と南面の柱列は揃っているが、斜面側の北面の柱は歪んで配置される。東列の柱は検出できなかったが、周辺の地形上これ以上東へ延伸することはないと思われる。各柱穴は15～30cm。西面中央と南面の左から2個目の柱穴から、土師器小皿・丸底杯が出土した。（石木）

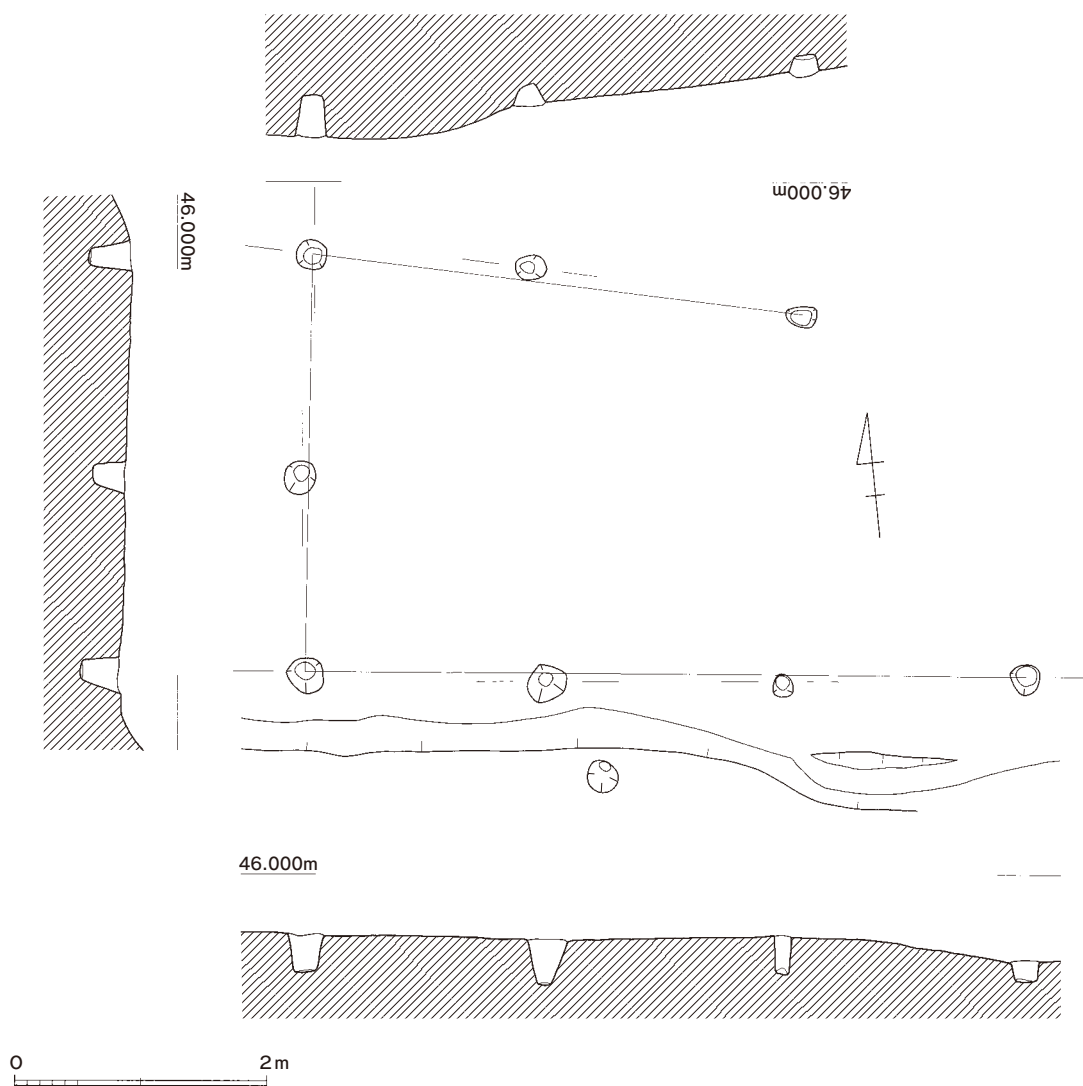
出土遺物（第9図）

土師器（28） 丸底杯もしくは碗の口縁部小片である。（井上）

（4）土坑

SX02（第12図・図版9）

調査区の北側に位置する。径1.0～1.2mの略円形プランの土坑である。底面はほぼ平らである。埋土はにぶい黄褐色土を呈し、しまりなくやわらかである。出土遺物は、須恵器があるが図化できなかった。（石木）



第11図 10次S B01実測図（1／60）

（5）谷部

S X01の斜面下方にあたる。7次調査地からの続きであり、谷奥部にあたる。重機によりS X01を埋めるパイラン土を主体とする表土を除去し、遺物が多数出土する黒褐色粘質土から人力による掘り下げをおこなった。上層は黒褐色粘質土、下層は褐色砂質土（青灰色土・黒褐色土を含む）である。上層には木片を多数含んでおり、7次調査谷部2層と同一層と考えられる。出土遺物は、上・下層とも須恵器が大半を占め、土師器小皿・丸底杯は数点確認できるのみであった。（石木）

出土遺物（第13・14図・図版20）

29～43は上層出土。

須恵器（29～40） 29～33は杯H蓋。29・31～33の口縁部は立ち、外面に稜がみられるが、30は天井部からゆるやかに口縁部へと至る。天井部外面は、29が手持ちヘラケズリ、32が回転ヘラ切りのほかは回転ヘラケズリである。29～31・33はヘラ記号をもつ。32は小片のため口径の

復元にやや難あり。34は杯H身。受部端部が分厚い。35は杯B蓋。口縁端部は断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ切りである。内外面とも重ね焼き痕がみられる。36は高台付皿。底部外面は回転ヘラ切りである。37は鉢か。口縁部片と底部片に接点はないが、同一個体と考えられるものである。平底で、体部は外方へと開き、体部外面には沈線を二条施す。38は平瓶。内面は底部と体部の境に粘土接合時の指頭圧痕がみられる。外面は回転ヘラケズリ後カキメを施す。39は甕口縁片。頸部外面にタタキ様のものがみられる。40は大甕口縁片。外面に波状文後、沈線八条を施す。

土師器 (41) 製塩土器か？口縁部内面に指頭圧痕がみられ、二次焼成を受ける。

弥生土器 (42) 甕底部片。底部は分厚い。

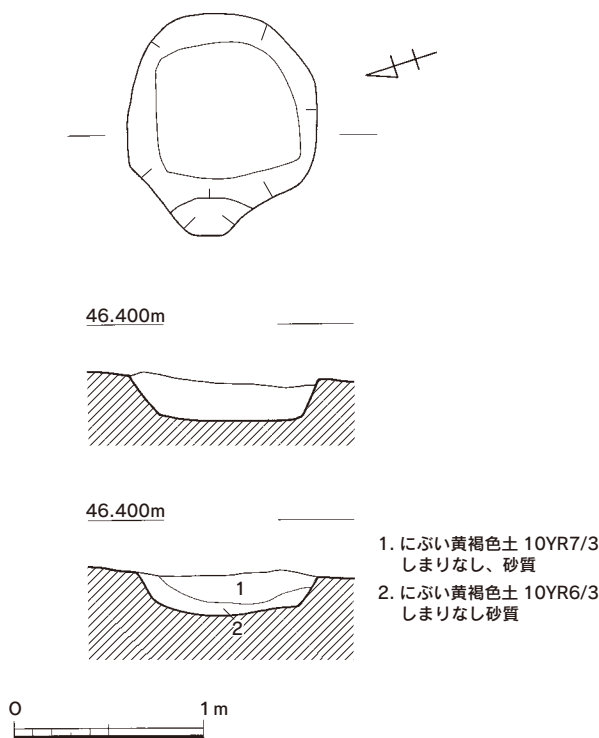
木製品 (43) 不明木製品。材を柂目にとり、隅丸長方形の短冊状を呈す。両面とも丁寧に整えられ、長辺は一辺と比べ、他辺が厚い。

44～55は下層出土。

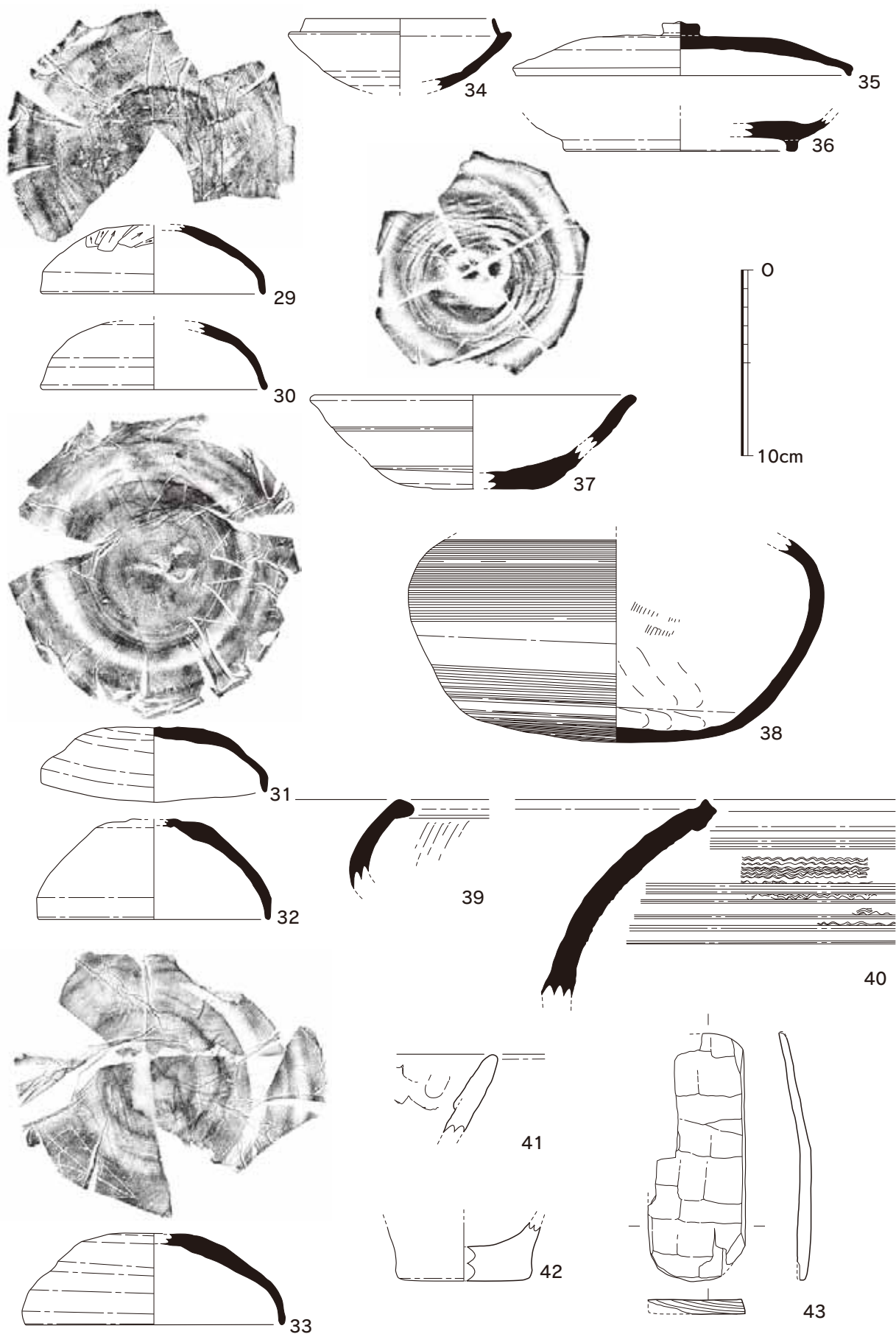
須恵器 (44～53) 44～50は杯H蓋。天井部外面は、44は回転ヘラ切りで板状圧痕が認められる。他は回転ヘラケズリが施される。45は器高が低く、天井部の器壁は厚い。44～49は天井部外面にヘラ記号が施される。51は杯H身である。体部は浅く、外面にヘラ記号が施される。52・53は椀。52は丸底の底部から口縁部にかけて開く形態で、体部外面下半は回転ヘラケズリ、上半はカキメ後沈線を二条、その沈線間に連続刺突文を施す。焼け歪む。53は丸底で口縁部はわずかに内湾する。底部は回転ヘラケズリし、体部外面にカキメ後沈線を二条施す。52は底部外面と体部外面に、53は底部外面にヘラ記号を施す。

土師器 (54) 甕。口縁部は外反し、端部は水平になる。体部外面は縦位のハケメ、体部内面は縦位のヘラケズリ、頸部内面は横位のヘラケズリを施す。

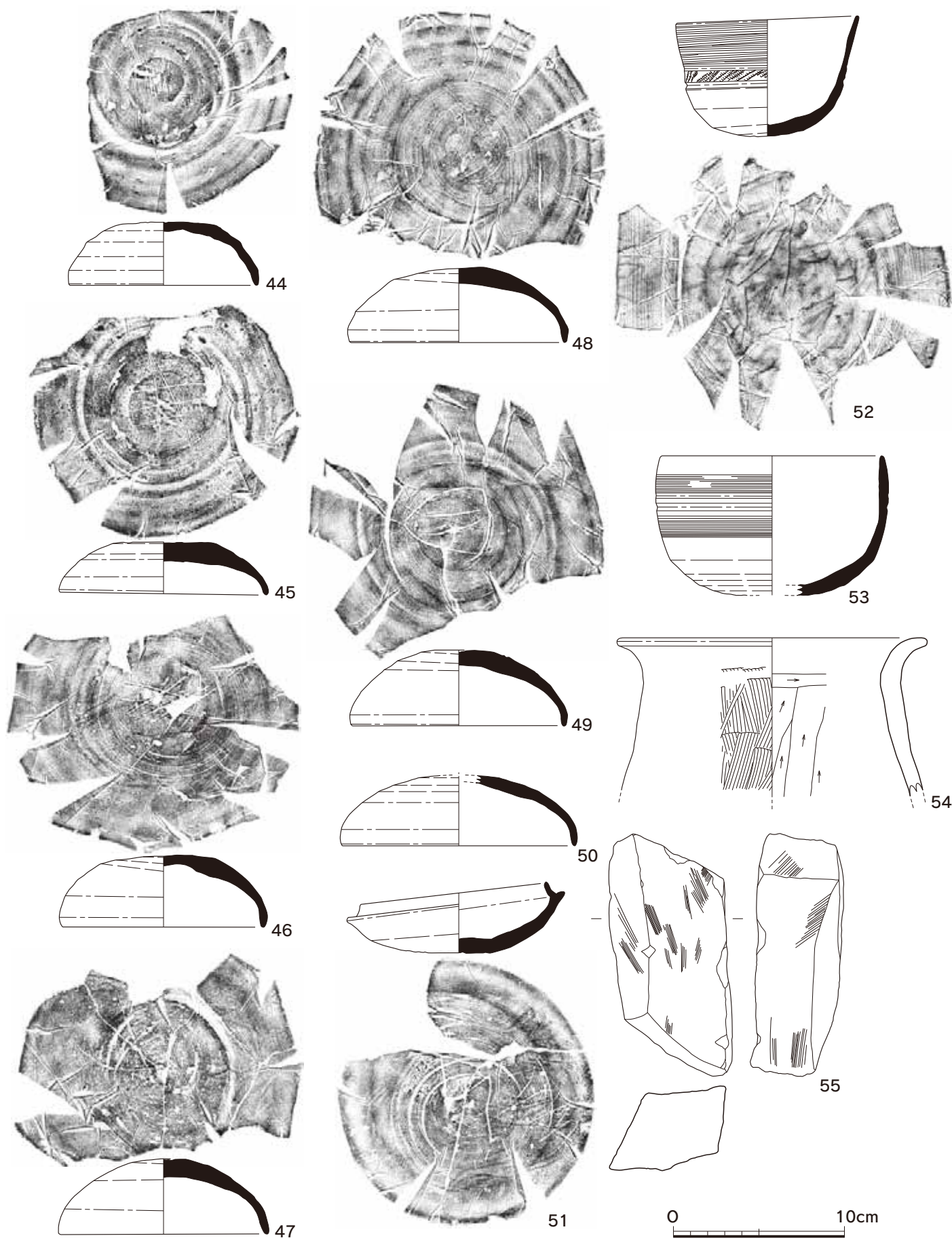
石製品 (55) 安山岩製。人為的に面を作り出し、粗い研磨を施している。欠損しており、本来は鍵形に伸びていたようである。性格は不明である。(井上)



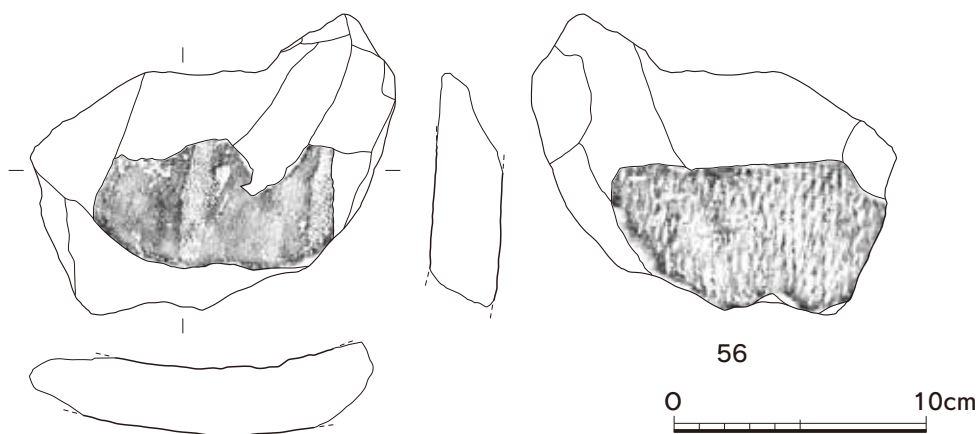
第12図 10次S X02実測図 (1 / 40)



第13図 10次谷部上層出土遺物実測図 (1 / 3)



第14図 10次谷部下層出土遺物実測図 (1 / 3)



第15図 10次表採遺物実測図（1／3）

（6）その他の出土遺物

表採遺物（第15図）

瓦（56） 表土剥ぎ後、S X01の上方で表採した。平瓦で凸面は縄目タタキ、凹面には布目痕が認められる。（井上）

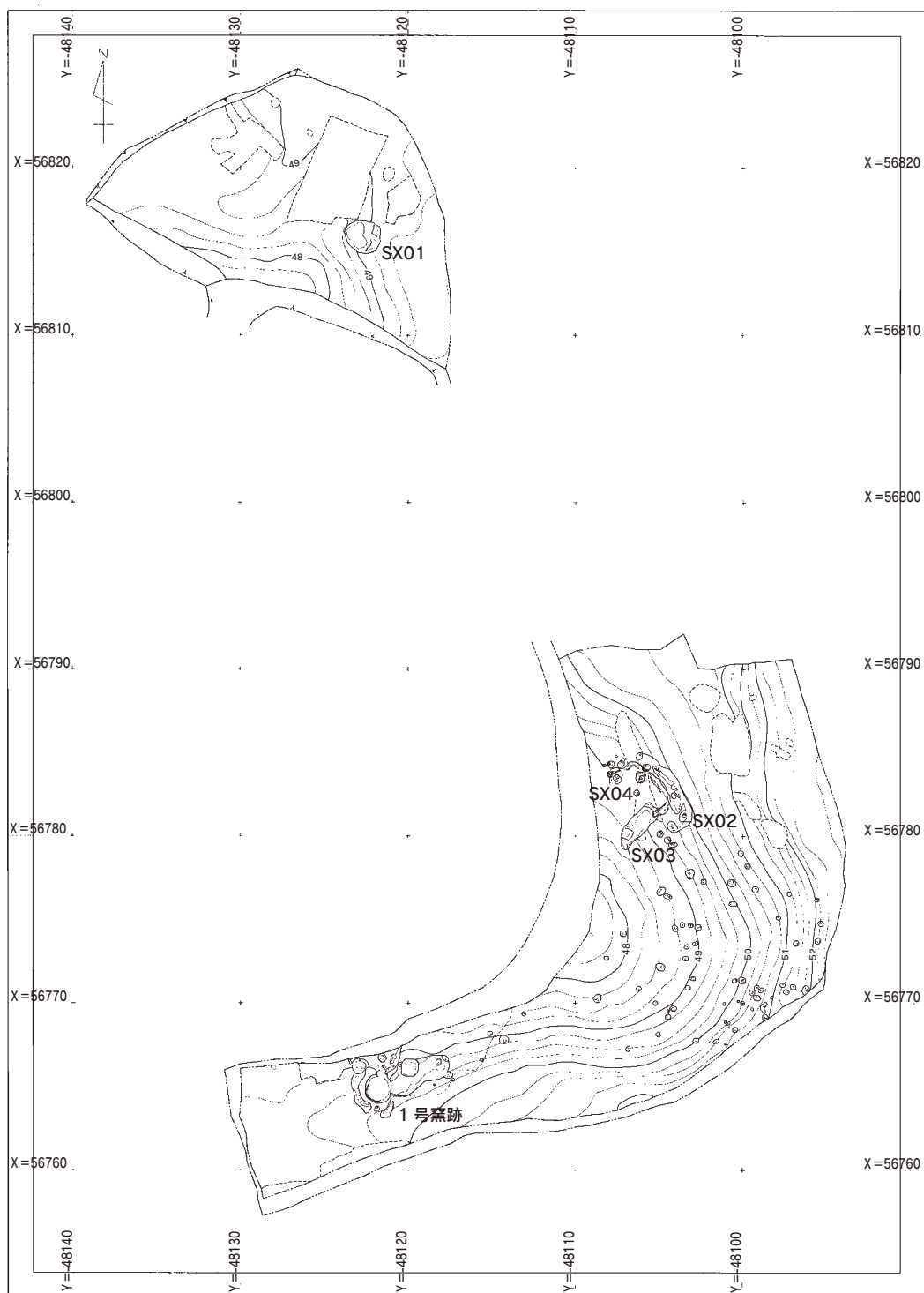
C．小結

10次調査地では、斜面を通路状に整形しており、柵列・掘立柱建物を配置することが判明した。S X01の時期は小皿に糸切りのものを含まず、瓦器・白磁の年代観から11世紀後半～12世紀前半と考えられ、S A01・S B01の年代も同様と考えて大過ない。また、谷部は6世紀末～7世紀初頭の遺物を相当含み、一部8世紀代の遺物とS X01と同様の時期の遺物を含むが、9・10世紀代の遺物は少なく、今後隣接する7次調査地の内容と合わせて検討していきたい。（石木）

2. 第11次調査

A. 調査概要（第16図・図版11・12）

第11次調査地は、現在三兼池となる谷から南東に派生した小谷の最奥部中腹に位置する。大野城市大字上大利614-1の一部他にあたり、調査面積は1,100㎡である。該地は西に向かって開く立地で、丘陵の頂部は内山緑地による造園・道路開発のため既に削平を受けていた。計画では、この部分を切り下げて公園化する予定であったため、削平の及ばない三兼池側の斜面について遺構の有無を確認するため試掘調査（54次）を平成16年8月19日～9月6日の間実施した。



第16図 11次調査地全体図（1 / 400）

表土剥ぎの結果、遺構が2ヶ所で確認され、北側の調査区を1区、南を2区として調査を開始した。調査は平成17年2月1日～3月25日の間実施し、一瀬智が担当した。1区は谷部北側の斜面にあたる。広い範囲に重機の削痕が認められ、遺構は斜面上に土坑1基（S X01）が検出された。遺物の出土はなかった。2区は谷部東側から南側の斜面にあたる。表土剥ぎの時点で東側の斜面に遺物を含む土の広がり認められ、完掘した結果、竪穴住居跡と考えられる遺構2基（S X02・04）と土坑1基（S X03）を確認した。南側の斜面には窯跡1基が確認された。また斜面上の広い範囲に多数のピットを検出したが、いずれも配置や形状が不整で遺物も伴わないため、性格は不明である。

出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・石器などがあり、古墳時代から奈良時代のものを中心とする。また、窯跡は炭窯であり、灰原からビール瓶が出土したことから現代の遺構であることが判明した。
(一瀬)

B. 遺構と遺物

(1) 1区の遺構

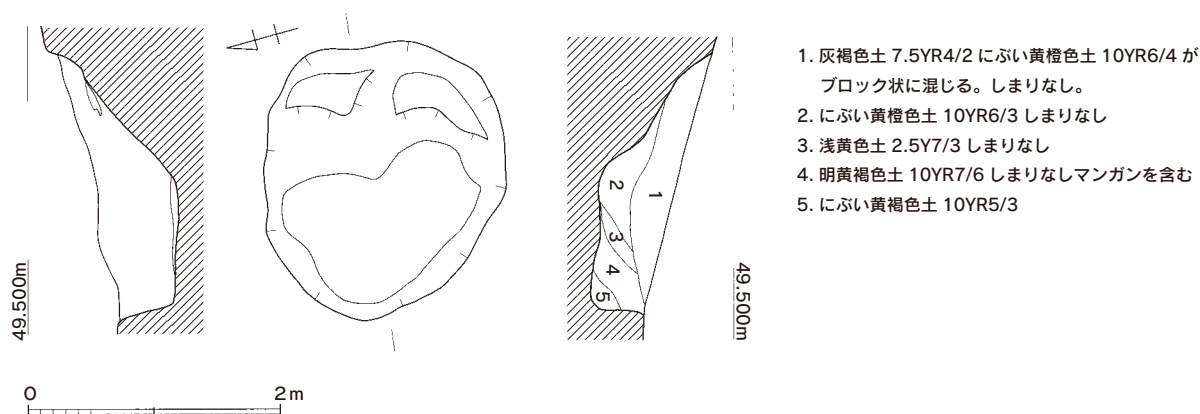
S X01 (第17図・図版11)

1区の中央やや東側、南西に向かって下る斜面上に位置する。平面形は長軸2.13×短軸1.93mのほぼ円形のプランを呈する。北側の一部が削平を受けて欠損する。床面は水平で斜面上方からの深さは125cm、土坑の断面形は逆台形状となる。遺物の出土はなかった。
(一瀬)

(2) 2区の遺構

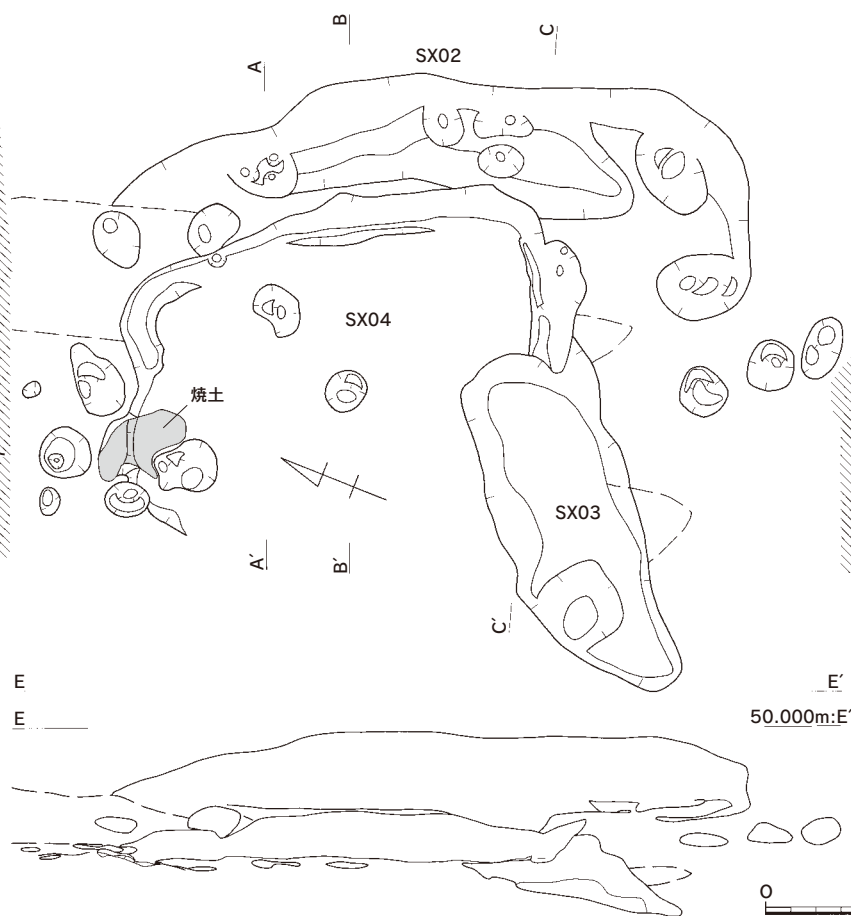
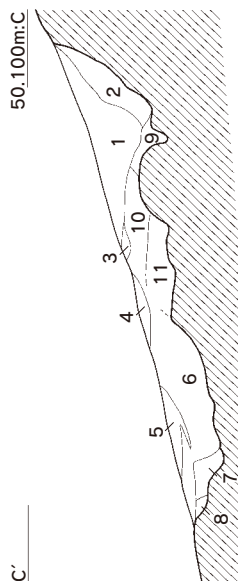
S X02 (第18図・図版12・14)

2区のうち、谷部東側斜面のほぼ中央に位置する。遺構検出時に斜面上に広がる不整形プランを検出したが中央部を細い攪乱が貫いており、平面では一連の遺構か複数の遺構か認識できなかった。このためプランを覆うベルトを設定した上で攪乱を除去し、斜面上方から掘り下げたところ、床面と思われる平坦面を検出したため、これをS X02とした。またこの時点でS X02の斜面下方に不整形プランを確認し、S X03とした。さらにS X02下層から斜面下方にかけて検出された平面方

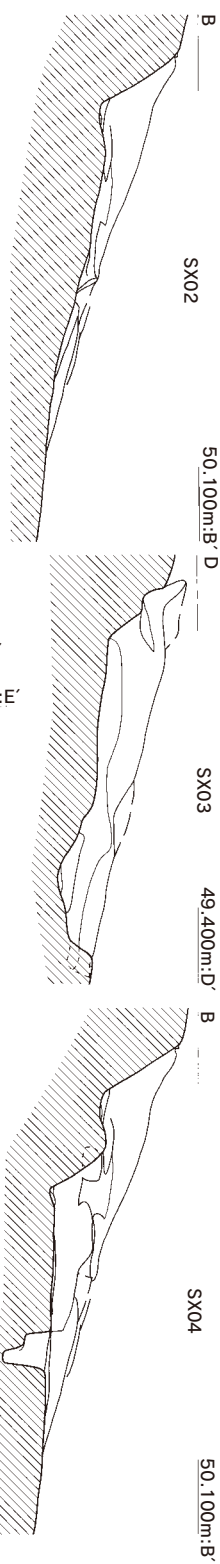
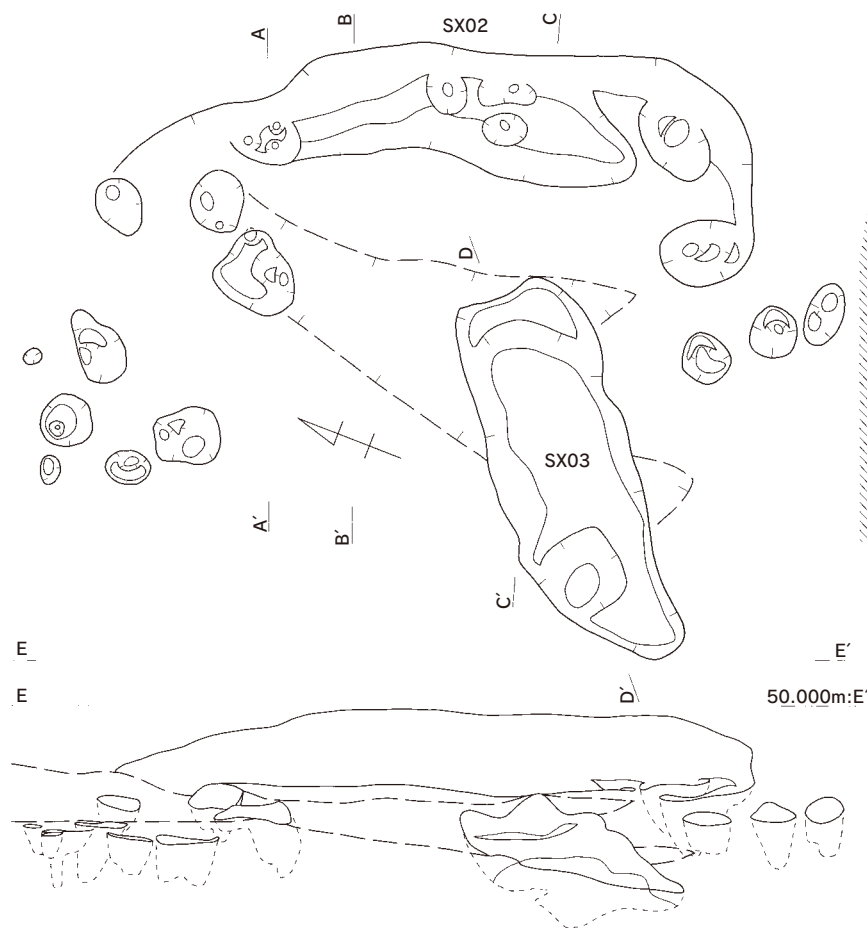
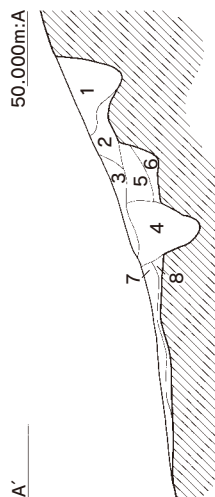


第17図 11次S X01実測図 (1 / 60)

1. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 炭を少量含む (SX02 埋土)
2. 明黄褐色土 2.5Y6/6 炭を少量含む (〃)
3. にぶい黄色土 2.5Y6/4 (〃)
4. 5 カクラン
6. にぶい黄褐色土 10YR3/4~4/3 (SX03 埋土)
7. 明黄褐色土 10YR6/8 炭を少量含む (〃)
8. にぶい黄褐色土 10YR4/3 (〃)
9. 地山
10. 明黄褐色土 2.5Y7/6 炭を少量含む (SX04 埋土)
11. " 10YR7/6 マンガンを多く含む (〃)



1. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 (SX02 埋土)
2. 明黄褐色土 10YR6/6 下層に炭を含む (SX02 埋土)
3. カクラン
4. 黄褐色土 2.5Y5/3 炭を含む (木根)
5. 明黄褐色土 10YR7/6 炭をふくむ
6. にぶい黄褐色土 10YR6/4 マンガンを含む
7. " 炭を多く含む
8. 黄褐色土 10YR7/8



第18図 11次S X02・03・04実測図 (1 / 60)

形プランの遺構をS X04とした。なお土層観察からS X02・03はS X04を切る関係にある。S X02・03の先後関係は不明である。

S X02は斜面下方にあたる西側が大きく消失する。このため全体の規模や平面形は不明であるが、残存する範囲で長軸は約5.2mを測る。斜面をL字形に掘り込み、床面が平坦に造られることから竪穴住居跡の可能性が考えられる。東側には壁溝と思しき溝がつく。プランの内外に不整形のピットが多数検出されたが、配置や形状からS X02との関係は考えにくい。(一瀬)

出土遺物 (第21図)

須恵器 (57～60) 57・58は杯H蓋。58は口縁部外面上方に稜を持つ。いずれも天井部外面にヘラ記号が施される。59は杯B身。高台は低く、底部端よりやや内側に貼付けられる。60は皿。体部～口縁部にかけてはかすかにふくらみ、底部外面には板状圧痕がみられる。底部外面に重ね焼き痕がある。

土師器 (61) 甗。口縁部・体部・裾部3片に接点はないが、同一個体と考えられる。体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケメ、裾部内面はヨコナデを施す。(井上)

S X03 (第18図・図版13・14)

S X02のやや下方に位置する。完掘した平面形は長軸約3.2×短軸約1.15mの不整長楕円形プランだが、斜面上方側を掘り過ぎており、本来の長軸は20cmほど短くなると思われる。床面は高低差があり、斜面下方に向かって下がる。遺物は出土するが、近接するS X02や重複するS X04の遺物と重なり、純粋にS X03に伴うとは判断し難い。このため性格等は不明であり、遺構とすべきか判断に迷う。(一瀬)

出土遺物 (第21図・図版21)

須恵器 (62・63) 62は杯H身で、口縁端部を打ち欠いている。立ち上がり部はやや低い。63は短頸壺で底部を欠損し、体部外面下半は回転ヘラケズリを施す。(井上)

S X04 (第18図・図版13・14)

S X02の下層に検出した。斜面下方の西側が消失するが、一辺3～3.5mの正方形に近いプランをとる竪穴住居跡と考える。斜面をL字形にカットして構築され、床面は水平に造られる。北壁の東隅から東壁・南壁にかけては部分的に壁溝が認められ、中央部の床面には深さ34cmのピット1つを検出した。対になるようなピットは確認できなかった。また残存する北壁の西側寄りはやや外に張り出す形状を呈し、床面に長軸80×短軸50cmの範囲で焼土の広がりが認められた。カマドと思われるが、袖等は確認できなかった。遺物は土師器甕の破片が多く出土した。

S X02と一連の遺構の可能性も考えたが、土層観察でS X02の床面からS X04埋土とS X02埋土の層界(A-A'断面土層の2層と5層境)に連続する炭の堆積が確認できたため、S X04はS X02に先行して構築された別遺構と判断した。(一瀬)

出土遺物 (第21図)

石器 (64) 安山岩製打製石鏃。挟りは深く、片方の脚部が他方より長い。(井上)

1号窯跡 (第19・20図・図版15～17)

2区のうち、谷部南側斜面の中央やや西側に位置する。南側斜面には須恵器や土師器の小片等を

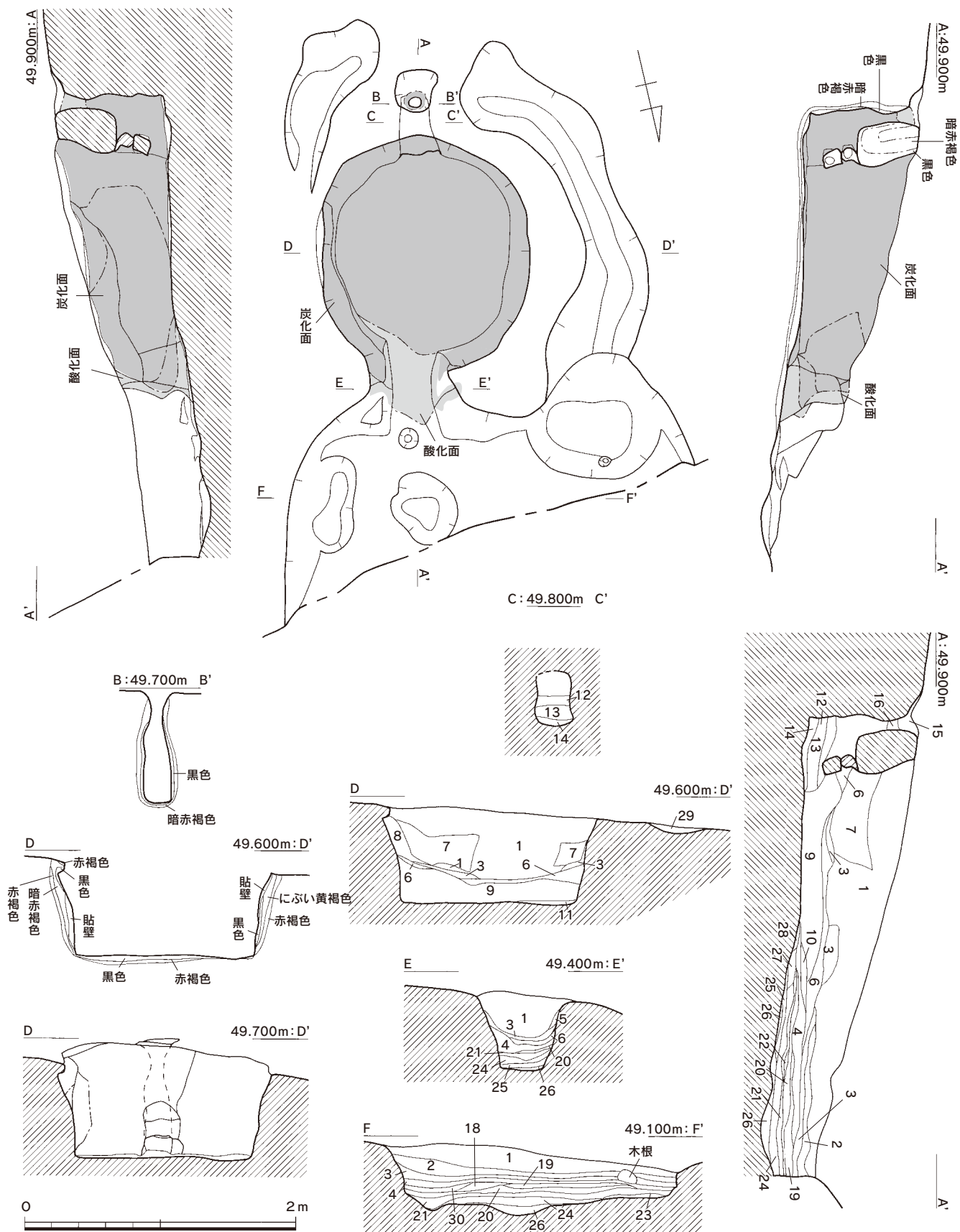
含む黄褐色土が薄く広がり、窯跡はその土を掘り込んで築造されていた。遺構検出の時点で平面円形の窯体プランが確認でき、炭窯の可能性が高いとの認識で調査を進めたが、窯体内の床面・壁面の大部分が炭素の付着により艶やかな黒色を帯び、床面や前庭部から多量の炭が出土したことは、その認識の妥当性を裏付けている。前庭部の左側には窯跡に伴うと考えられる土坑が確認され、これを前庭部左土坑として調査した。なお前庭部の中位より斜面下方と灰原は調査区外にあたり、本調査では窯体から前庭部上半までを対象としている。

炭窯は窯体を掘削して材を詰めた後に天井部を構築するため、本窯跡もいわゆる半地下式の平窯と考えられる。窯体は、天井部のほとんどが窯体内に崩落する他は完全に近い形で残存していた。水平長は主軸上2.40m、主軸はN-13°-Wにとる。平面プランは整った円形の焼成部に幅の狭い焚口・燃焼部が付き、焚口に対面する奥壁の最下部に煙道口が設けてある。天井部は左側壁から続く箇所、長さ62cm、最大幅6cmのみ残り、床面からの高さは約60cmだった。窯体の横断面形状は逆台形状で、欠損する天井部はドーム状を呈したと考えられる。床面は窯体内概ね水平だが、前庭部から焼成部1/3にかけてやや傾斜がみられ、煙道部にはやや凹凸がある。貼壁は厚さ2～4cmで側壁の広い範囲に認められ、燃焼部・焼成部境から前庭部の床面には2枚の貼床が確認できた。また煙道口にも補修の跡がみられる。排煙口の左右には斜面下方に伸びる排水溝が確認できた。なお、窯体内に崩落した天井壁（9層）の上から検出面までは、人為的に短期間で埋められた堆積状況（1・7層）が看取できる。

焚口・燃焼部 焚口部は最も狭い箇所、幅0.29m。焼成部との境は、床面の傾斜転換点とはズレがあるが平面プランや床面の被熱状況より、主軸上で焚口部から0.38mの箇所と考える。燃焼部・焼成部境から前庭部にかけての床面には、縦断面土層から1次操業の灰層（25層）上と、2次操業灰層（21層）上に2枚の貼床（24・27・28層、20層）が確認できた。床面傾斜角度は1次操業面で10°、2次操業面で8°を測り、最終操業面はほぼ水平となる。

焼成部 焼成部は平面形は均整のとれた円形で長径1.44×短径1.30mとやや縦に長い。床面傾斜角度は下方1/3まで燃焼部から続く傾斜を測り、上方2/3では水平となる。左側壁の2/3と右側壁の1/3が青灰色の還元色を帯びる他は、壁面・床面とも炭素が付着して真っ黒だった。貼床は上述のように燃焼部との境付近に認められるのみだが、貼壁は側壁の広い範囲にわたって認められた。左の側壁には貼壁による明瞭な稜線が確認できる。

排煙部 焼成部最奥部、床面からほぼ垂直に立ち上がる奥壁の最下部に煙道口がある。煙道は奥壁を更に奥へ掘り込んだトンネル状の掘り込みに、細長い筒状の穴を垂直に取り付けた構造となる。トンネル状の煙道部は平面プランが縦に長い台形で長さ0.38m、幅は奥に進むほど狭くなり煙道口で0.30m、最奥部では0.19mとなる。高さは0.39～0.40mで、床面は焼成部からわずかに下がった後5cmほど高くなりやや凹凸がみられる。筒状の煙道部はトンネル状の煙道部最奥部に垂直に取り付き、平面形は最も狭い箇所、長径0.10×短径0.08mの横に長い楕円形となる。排煙口は長径0.17×短径0.14mの横に長い楕円形プランで、床面から排煙口までの高さは0.77cmを測る。排煙部の壁面は全面黒色を帯び、排煙口近くのみ赤化していた。また煙道口には、開口部の上部を塞ぐブロック状の補修材が2つ貼り付けられていた。この補修で当初0.39mの煙道口の高さは0.13mま



第19図 11次1号窯跡実測図 (1 / 40)

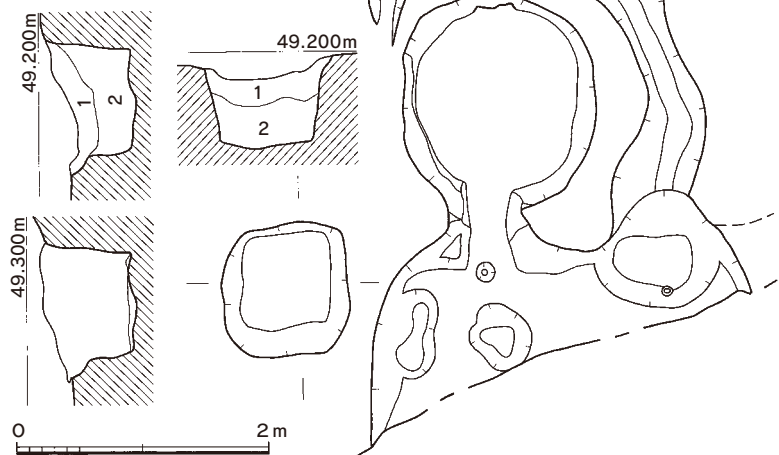
〈第19図土層注記〉

- | | | |
|---|---|--|
| 1. 明黄褐色粘質土10YR7/6+黄褐色粘質土7.5YR7/8が混、ガラス瓶・ビニール紐等を含む(2との層界より) | 11. 黒褐色砂質土2.5Y3/1炭を含む(炭層) | 21. 黒色土10YR2/1炭を多く含む(炭層) |
| 2. 明黄褐色土砂質土10YR7/6 | 12. 明黄褐色粘質土10YR7/6 | 22. にぶい黄褐色土10YR7/3 |
| 3. 黄褐色土砂質土10YR7/8 | 13. 灰黄褐色土10YR6/2炭を多く含む | 23. 明黄褐色土10YR7/6炭・焼土灰を多く含む |
| 4. 黒褐色土2.5Y3/1細かい焼土粒、炭を多く含む(最終操業灰層) | 14. にぶい黄色砂質土2.5Y6/4炭を含む | 24. 黄褐色土7.5YR7/8炭・焼土塊を含む(貼床) |
| 5. 灰黄褐色土10YR4/2 | 15. 黄褐色土10YR7/8に暗灰黄色で2.5Y5/2が混、炭・焼土塊を含む | 25. 黒褐色土5YR3/1炭・焼土灰を多く含む(当初灰層・上面酸化) |
| 6. 暗灰黄色土2.5Y5/2 | 16. 黒褐色土2.5Y3/1固い・細かい粒状の炭を含む、煙突閉塞土? | 26. 黄灰色土2.5YR6/1に明黄褐色2.5Y7/6が混、炭・焼土塊含む(当初灰層) |
| 7. 灰黄色砂質土2.5Y6/2小粒状の赤褐色粘土を含む | 17. 19と同じ | 27. 黒褐色土7.5YR3/1(最終硬化面)貼床 |
| 8. にぶい黄褐色土砂質土10YR7/4 | 18. 黒色土10YR2/1炭を多く含む(炭層炭) | 28. 灰白色10Y7/1 |
| 9. 天井部崩ラク土明赤褐色5YR5/6～灰オリーブ5Y6/2～灰色5Y6/1～黒色に被熱した天井壁がブロック状に堆積 | 19. 黒褐色土10YR3/1炭を多く含む(操業灰層) | 29. 明黄褐色土10YR6/8マンガ混、炭・焼土塊を少し含む |
| 10. 黄褐色砂質土2.5Y5/3炭を含む | 20. 灰黄褐色土10YR5/2に明赤褐色土5YR5/8がブロック状に混炭を含む(貼床?) | |

で狭められている。炭窯では、火が焚口から煙道へ通りよく走ることによって燃焼が進みすぎると木材が過度に灰化してしまうため、必然的に焚口は小型化し、煙道は床面近くから上に向けて通じる構造を持つ必要があるという。この補修には煙道口の高さをより低く狭めることで過度の燃焼を防ぎ、材の灰化を抑える目的があったと考えられる。

前庭部 残存する幅は約2.9m。但し右端は攪乱のため欠

1. 黒褐色土 7.5YR3/2 焼土塊・炭を多量に含む
2. 灰黄褐色土 10YR5/2 にぶい黄褐色土 10YR7/4 をブロック状に含む炭を少量含む



第20図 11次1号窯跡前庭部土坑実測図(1/60)

損、下半は調査区外になるため全体の規模・形状は不明である。床面には炭を多量に含む操業時の灰層と貼床と考えられる土層が互層となって堆積し、断面土層の観察から少なくとも3面の操業面が確認できる。しかし調査の下手際から平面的に把握できたのは1次操業面のみだった。なお、最終操業時の灰層(4層)直上から昭和30～40年代に使用されたビール瓶が出土している。

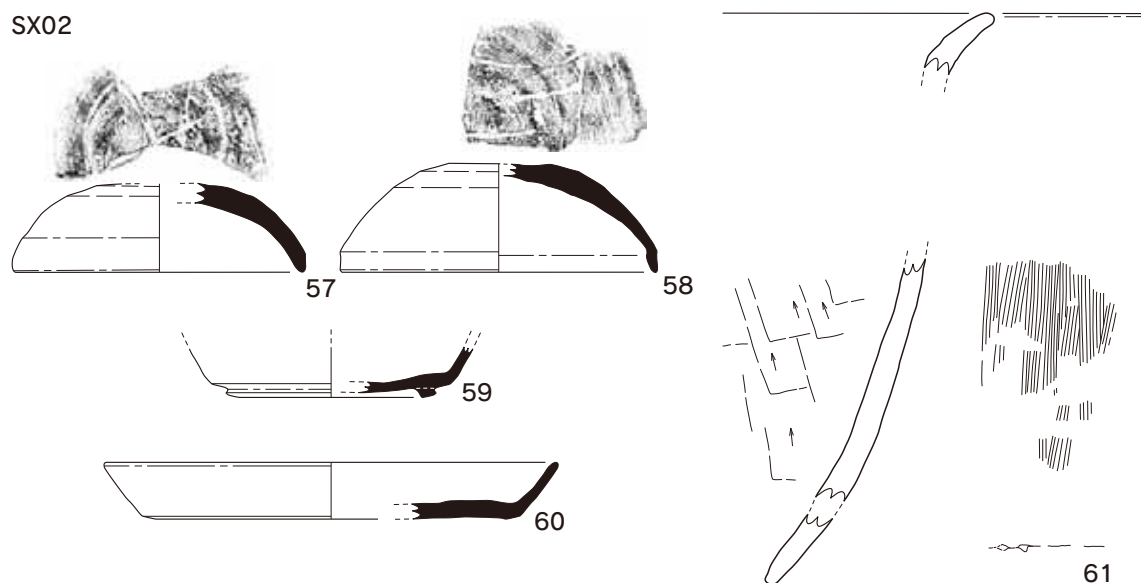
前庭部左土坑 前庭部の左に1基確認された。平面形は一辺約1.0mの略正方形プランで、深さは斜面上方の最も深い箇所0.68m。床面は概ね平坦である。遺物の出土はないが、埋土土層は窯壁片と思しき焼土ブロックや炭をかなり多量に含んでいた。

排水溝 排煙口の左右から斜面下方に向けて伸びる溝を確認した。左側は最も深いところで0.18mを測り、長さは約1.2m伸びたところで消失する。右側は窯体に沿って斜面下方に伸び、前庭部に接続して終わる。深さは斜面上方で0.15mを測る。(一瀬)

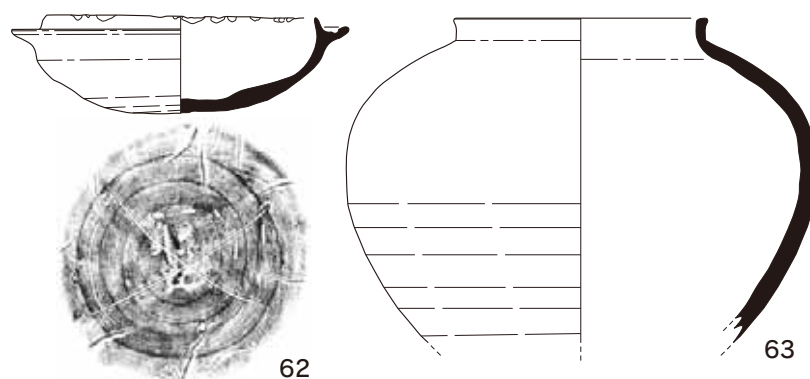
出土遺物 (第21図・図版21)

ガラス製品 (65) キリンビール小瓶である。肩部外面に「登録商標 キリンビール」、体部外面下方に「㊤ 334ml」とある。肩部外面の「録」と「商」の間には「K」と「B」を重ねた記号が配置される。底部外面中央の文字は、中央に「4-63 3」(中央の「63」の「6」上半と「3」は、

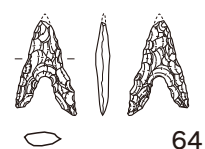
SX02



SX03

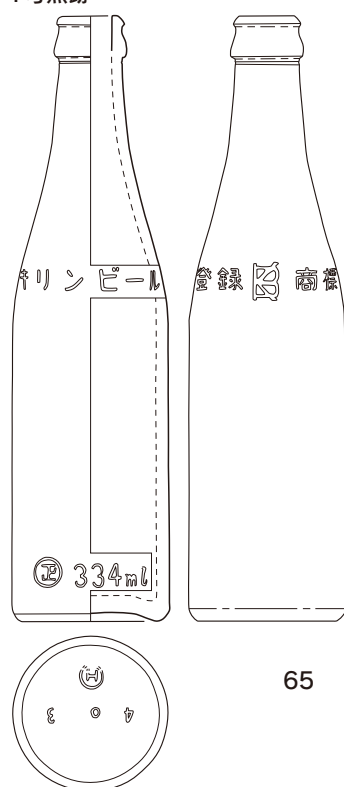


SX04

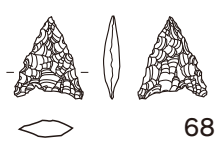
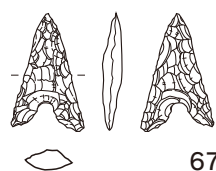


0 5cm

1号窯跡



その他の出土遺物



0 5cm

0 10cm

第21図 11次調査地出土遺物実測図 (64・67・68は1/2、その他は1/3)

摩滅が著しくかすかに見えるのみで図化はできず)、下方に「㊤」、上方に「2」(摩滅が著しくかすかに見えるのみで図化できず)が見え、「63」を中心に十字形に配置されている。この「63」は、この瓶の製瓶年代の1963年、昭和38年を示すこと、昭和31年計量法施行に伴い、同年以降に製瓶されたものには体部外面下方に内容量の記載があることをキリンビール株式会社から御教示いただいた。これらから、この製品が昭和38年以降に流通していたものと考えられる。

須恵器 (66) 杯B身である。高台は細く、外側へふんばる。(井上)

その他の出土遺物 (第21図・図版21)

石器 (67・68) 67は1号窯跡周辺(南側斜面D区)から出土した。安山岩製で、抉りは深い。68はS X 04と1号窯跡の間の斜面(東側斜面)から出土した。黒曜石製で、抉りは浅い。

土製品(69) 南側斜面検出中に出土した。土管である。モルタル製か?外面に布目状痕が認められ、内面にはススが厚く付着している。炭窯の煙突か?(井上)

C. 小結

まず、調査地で確認された遺構についてまとめたい。

・S X 01は比較的整った平面形や平坦な床面などから人為的に掘削された遺構と考えられるが、周囲を含めて遺物の出土がなく、その位置付けに苦慮する。

・一方でS X 03は、平面プランは不整形で床面に凹凸があるが、埋土から土師器甕の破片や須恵器Ⅳ期の杯身、Ⅶ期の短頸壺などの遺物が出土している。但し前述のようにS X 02・04の遺物と重複し、周囲から流入した可能性もあり時期や性格は不明である。

・S X 02は斜面をL字形にカットして平坦面を造り、プランとしては竪穴住居跡と考えられるが、削平部分が大きく、柱穴・カマド等は検出されなかった。出土遺物は遺構埋土・周辺ピットとも、土師器甕の破片多数にⅣ期、Ⅶ期の須恵器が混ざり、遺構の切り合いからもS X 04に後出すると考えられる。

・S X 04は竪穴住居跡である。床面から柱穴やカマドと思しき焼土が確認された。出土遺物は図化できなかったが、土師器甕の破片がほとんどで、Ⅳ期の杯蓋と思われる須恵器小片や石鏃を含む。

・1号窯跡は炭窯跡。操業時期を即断できる遺物は出土していないが、前庭部の最終操業に伴う灰層直上から出土したビール瓶や、道路・緑地の造成に因ると考えられる短期間で人為的な窯跡の埋没状況から、昭和戦後期、40年代前後の時期に位置付けられる。(一瀬・石木)

表1 本堂遺跡 10 次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
1	須恵器	杯蓋	SX01-5・6間ベルト 上層	①(13.3) ②1.4つまみ径(2.0)	回転ナデ成形後、天上部内 面を不定方向ナデ。外面 3/4を回転ヘラ削り。つま み貼付。	A:1mm以下の白色砂粒をやや多量含 む。B:良好。C:内外共灰N6/	
2	土師器	小皿	SX01-2 下層	①8.4②1.2③6.5	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C:内外共浅黄橙10YR8/4～橙 5YR6/6	
3	土師器	小皿	SX01-1 上層	①8.8②1.3③6.3	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。	A:3mm以下の白色砂粒、微細～1mm の黒色粒を少量含む。B:良好。C:外浅 黄橙10YR8/4、内明黄褐10YR7/6	
4	土師器	小皿	SX01-9・10間 上層	①(8.8)②1.2③7.4	回転ナデ成形後、内面は不 定方向ナデ。板状圧痕あり。	A:微細な白色砂粒を少量、雲母を微 量含む。B:良好。C:内外共浅黄橙 10YR8/3～明黄褐10YR7/6	
5	土師器	小皿	SX01-11 下層	①(9.4)②1.25 ③(6.8)	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C:外にぶい黄橙10YR7/4、 内浅黄橙10YR8/4～明褐7.5YR4/6	
6	土師器	小皿	SX01-9 下層	①(9.8)②2.1 ③(7.4)	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。 C:内外共浅黄橙10YR8/3	
7	土師器	丸底杯	SX01-1・2集積 2群 下層	①(14.2)②2.6	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C:外浅黄橙10YR8/4、内にぶい 橙7.5YR7/4	黒斑あり。
8	土師器	丸底杯	SX01-12 周辺 表土ハギ時	①14.95②3.3	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B: 良好。C:内外共灰白2.5Y8/2	黒斑あり。
9	土師器	丸底杯	SX01-1・2間ベルト 上層	①15.4②3.5	磨滅の為、調整不明。板状 圧痕あり。	A:4mm以下の白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C:内外共浅黄橙10YR8/3～ 灰白10YR8/2	
10	土師器	丸底杯	SX01-3 下層	①(14.6)②3.2	磨滅の為、調整不明。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C:外浅黄橙10YR8/4、内灰 白10YR8/2～浅黄橙10YR8/4	
11	土師器	丸底杯	SX01-4 下層	①(16.0)②3.1	磨滅の為、調整不明。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多量、0.5 ～1mmの茶褐色粒を少量含む。B:不良。 C:外橙5YR6/6～にぶい黄橙10YR7/4、 内橙5YR6/6	
12	土師器	丸底杯	SX01-4 下層	①16.2②3.6	回転ナデ成形後、底部内面 は不定方向ナデ、外面はヘ ラ切り後ナデ。板状圧痕あ り。	A:微細な白色砂粒、0.5～2mmの茶 褐色粒を少量含む。B:不良。C:外橙 5YR6/6、内橙5YR6/6～にぶい黄橙 10YR7/4(マーブル状)	
13	土師器	小椀	SX01-2 中層	①(9.45)②3.3 ④4.9	回転ナデ成形。底部外面は ヘラ切り後ナデ、板状圧痕 あり。高台貼付。内面は磨 滅。	A:1mm以下の白色砂粒、茶褐色粒を少 量、雲母を微量含む。B:良好。C:内外 共にぶい橙7.5YR7/4	
14	土師器	椀	SX01-4 下層	①(14.3)②3.1 ④8.3	磨滅の為、調整不明。	A:1mm以下の白色砂粒、茶色粒を少量 含む。B:不良。C:内外共灰白2.5Y8/2	
15	土師器	椀	SX01-7・6間ベルト 上層	②3.15+α④8.7	回転ナデ成形後、内面は不 定方向ナデ、外面はナデ。 高台貼付。	A:0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:内外共にぶい黄橙10YR7/4	
16	瓦器	椀	SX01-2 中層	②3.6+α④6.25	回転ナデ成形。底部外面は ナデ。高台貼付。内面は磨 滅。	A:微細な白色砂粒、0.5～1mmの黒色 粒を少量含む。B:不良。C:内外共灰白 2.5Y8/1	
17	土師器	小皿	SX01-1・2間ベルト 上層	①9.6②1.95	磨滅の為、調整不明。	A:微細な白色砂粒をやや多量、雲母を 微量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙 10YR6/3～黒褐10YR3/1、内にぶい 黄橙10YR7/3～褐灰10YR4/1	タール状の煤が 内外面の口縁部、 内面の底部に付 着。全体的に黒 変している。
18	土師器	丸底杯 (灯明)	SX01-2 中層	②1.4+α	回転ナデ成形。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多量含 む。B:良好。C:内外共浅黄橙10YR8/4	傾き不確実。内 面に煤付着。
19	土師器	丸底杯	SX01-4 下層	①(15.4)②2.5	磨滅の為、調整不明。	A:2mm以下の白色砂粒を少量、0.5 ～1mmの茶色粒を含む。B:不良。C: 外橙5YR6/6、内橙5YR6/6～浅黄橙 10YR8/3(マーブル状)	底部内面に煤付 着。

表2 本堂遺跡 10 次調査出土遺物観察表②

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
20	白磁	椀	SX01-4・5間ベルト 下層	②2.75+ α	回転ナデ後施釉。玉縁口縁。	A: 灰白7.5Y8/1。B: 良好。釉調: 灰白10Y8/1、半透明で光沢あり、細かい貫入が入る。	
21	白磁	椀	SX01-12 上層	②3.25+ α ④(6.0)	見込みに沈線。高台削出。暈付を斜めに削る。暈付、高台内は露胎。	A: 灰白10Y8/1。微細な黒褐色粒を少量含む。B: 良好。釉調: 灰白10Y8/1。透明でやわらかな光沢あり。	
22	滑石製品	石鍋	SX01-1・2集石 1群 下層	②6.8+ α	削り成形。		
23	石製品	不明	SX01-2 中層	長10.3+ α 幅14.6厚4.6 重1035	上面は滑らかであるが、明瞭な加工痕、使用痕は見られない。		砂岩。
24	鉄製品	釘	SX01-4 下層	長4.3+ α 幅0.8厚0.6			
25	鉄製品	釘	SX01-5 上層	長3.65+ α 幅1.2厚0.6			
26	鉄製品	釘	SX01-6 下層	長4.7+ α 幅1.5厚0.7			
27	鉄製品	釘	SX01-6 下層	長4.1+ α 幅1.5厚0.6	木質が残る。		
28	土師器	丸底杯	SB01-2	②2.4+ α	磨滅の為、調整不明。	A: 2mm以下の白色砂粒を微量、雲母、1mm以下の黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共浅黄橙10YR8/3 ~ 明黄褐10YR7/6	
29	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 黒色土	①12.1②3.7+ α	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を手持ちヘラ削り。	A: 5mm以下の白色砂粒を多量含む。B: 良好。C: 外オリーブ灰5GY5/1 ~ 暗緑5G3/1、内暗緑灰10GY5/1	天井部外面にヘラ記号。
30	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 黒色土 (表土ハギ)	①(12.2)②3.6+ α	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/3を回転ヘラ削り。	A: 1mm以下の白色砂粒をやや多量、微細な黒色粒を微量含む。B: 良好。C: 外オリーブ灰2.5GY6/1 ~ 灰白2.5GY8/1、内明オリーブ灰2.5GY7/1	天井部外面にヘラ記号。
31	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 黒色土 (表土ハギ)	①12.15②4.05	回転ナデ成形。外面3/5を回転ヘラ削り。	A: 3mm以下の白色砂粒を多量、微細な黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共暗青灰5B4/1	体部外面にヘラ記号。歪が大きい。
32	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 黒色土	①(12.6)②5.4	回転ナデ成形。天井部はヘラ切り後ナデ。	A: 微細な白色砂粒を少量、黒色粒をやや多量含む。B: 良好。C: 外灰白7.5Y7/1 ~ 灰7.5Y6/1、内灰白7.5Y7/1	
33	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 黒色土	①14.0②4.95	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面3/5を回転ヘラ削り。	A: 1mm以下の白色砂粒をやや多量、微細な黒色粒を多量含む。B: やや良好。C: 内外共灰7.5Y6/1	体部外面にヘラ記号。
34	須恵器	杯身	谷部谷頭 黒色土	①(10.2) ②3.8+ α 受部径(12.1)	回転ナデ成形後、天井部内面を一定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A: 微細な白色砂粒を多量、微細な黒色粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共灰5Y5/1	
35	須恵器	杯蓋	谷部2区 斜面 (表土ハギ)	①(17.95) ②2.9つまみ径2.0	回転ナデ成形。天井部はヘラ切り後ナデ。	A: 2mm以下の白色砂粒を少量、微細な黒色粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共青灰5PB6/1 ~ 明青灰5PB7/1	重ね焼きによる変色あり。
36	須恵器	高台付皿	谷部谷頭 黒色土	②1.8+ α ④(12.6)	回転ナデ成形後、底部内面は不定方向ナデ、外面はヘラ切り後ナデ。高台貼付。	A: 微細な白色砂粒を少量含む。B: やや不良。C: 外灰白N7/ ~ 灰N4/、内灰白N8/	
37	須恵器	鉢?	谷部谷頭 褐色砂質土 谷部谷頭 黒色土	①(17.6)②5.1 ③8.2	回転ナデ成形。底部内面に同心円当て具痕あり。外面1/2を回転ヘラ削り。	A: 3mm以下の白色砂粒をやや多量、3mm以下の赤褐色粒を少量、微細な雲母を微量含む。B: やや不良。C: 外浅黄橙7.5YR8/4 ~ 灰褐7.5YR5/2、内橙5YR7/6 ~ にぶい橙5YR6/4	口縁破片接合不可。
38	須恵器	平瓶	谷部谷頭 黒色土 (表土ハギ)	②10.9+ α	回転ナデ成形。体部外面1/3を回転ヘラ削り、全面にカキメ。外面上位に平行タタキあり。内面中位に平行当て具痕あり、下位は底部接合時の指頭痕あり。底部内面は不定方向のナデ。	A: 4mm以下の白色砂粒を少量、2mm以下の黒色粒を多量含む。B: 良好。C: 外オリーブ灰2.5GY5/1 ~ にぶい黄褐10YR5/3、内暗オリーブ灰5GY4/1	

表3 本堂遺跡 10 次調査出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
39	須恵器	甕	谷部谷頭 黒色土	②4.75+ α	回転ナデ成形。頸部外面にタタキ?あり。	A:微細な白色砂粒をやや多量、黒色粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/、内灰5Y6/1	
40	須恵器	大甕	1区 HD10-3下斜面上検出中	②10.7+ α	回転ナデ成形。波状文後に沈線を施す。	A:5mm以下の白色砂粒を少量、微細な黒色粒子を微量含む。B:良好。C:外青黒5PB1.7/1、内暗紫灰5P3/1、断面暗青灰5PB4/1～暗紫灰5PR4/1	
41	土師器	製塩土器	谷部谷頭 褐色土	②4.2+ α	内面指頭痕、粘土接合痕あり。外面は磨滅。	A:5mm以下の白色砂粒を多量含む。B:良好。C:外淡赤橙2.5YR7/3、内赤灰2.5YR4/1～淡赤橙2.5YR7/3	二次焼成あり。
42	弥生土器	甕	谷部谷頭 黒色土 谷部谷頭 褐色砂質土	②3.2+ α ④(7.0)	磨滅の為、調整不明。	A:0.5～3mmの白色砂粒を多量含む。B:やや不良。C:外にふい橙5YR7/3～灰白2.5Y8/2、内灰白2.5Y8/2	
43	木製品	不明	谷部谷頭 黒色土	長13.4幅5.25 厚0.7	表裏面、側縁を加工している。		柾目材。
44	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①(11.15)②3.75	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ、外面はヘラ切り後ナデ。	A:3mm以下の白色砂粒を微量、微細な黒色粒子を少量含む。B:良好。C:内外共灰白2.5Y8/1	天井部外面にヘラ記号。
45	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①12.25②3.1	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:5mm以下の白色砂粒を多量、微細な黒色粒子を微量含む。B:良好。C:外暗青灰5PB3/1～暗青灰5PB4/1、内紫灰5P5/1、断面明青灰5PB7/1	天井部外面にヘラ記号。
46	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①11.9②4.2	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面3/5を回転ヘラ削り。	A:3mm以下の白色砂粒を微量含む。B:不良。C:外灰5Y6/1～灰白5Y7/1、内灰白5Y8/1	天井部外面にヘラ記号。
47	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①12.3②4.4	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:4mm以下の白色砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰黄褐10YR5/2～灰白10YR7/1、内黒褐10YR2/1～灰黄褐10YR4/2	天井～体部外面にヘラ記号。
48	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①12.6②4.4	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:6mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外褐灰5YR4/1～にふい橙5YR6/4～灰白10YR8/1、内灰褐5YR4/2	体部外面の2ヶ所にヘラ記号。
49	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①12.6②4.4	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:3mm以下の白色砂粒をやや多量、微細な黒色粒子を多量含む。B:良好。C:外暗青灰5B3/1～暗青灰5PB4/1～灰白2.5GY8/1、内暗青灰5PB4/1	天井部外面にヘラ記号。
50	須恵器	杯蓋	谷部谷頭 褐色砂質土	①(13.7)②4.1	回転ナデ成形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:4mm以下の白色砂粒をやや多量含む。B:良好。C:外暗青灰5B4/1、内暗青灰5PB4/1、断面芯暗赤灰5R4/1	
51	須恵器	杯身	谷部谷頭 褐色砂質土	①11.05 ②4.1受部径12.8	回転ナデ成形後、底部内面を不定方向ナデ。外面3/5を回転ヘラ削り。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:やや良好。C:外褐灰7.5YR7/2～褐7.5YR4/4、内浅黄橙7.5YR8/4～明褐7.5YR5/6	底部～体部外面にヘラ記号。
52	須恵器	椀	谷部谷頭 褐色砂質土	①10.7②7.1	回転ナデ成形後、外面上半にカキメ、刺突文、沈線を施す。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:6mm以下の白色砂粒をやや多量含む。B:良好。C:内外共暗青灰5PB3/1	底部外面にヘラ記号。
53	須恵器	椀	谷部谷頭 褐色砂質土	①(13.1) ②7.45+ α	回転ナデ成形後、外面にカキメ。外面3/5を回転ヘラ削り。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多量、微細な黒色粒子を多量含む。B:やや不良。C:外黄灰2.5Y6/1～灰白2.5Y8/2、内灰白2.5Y7/1～灰黄2.5Y7/2	底部外面にヘラ記号。
54	土師器	甕	谷部谷頭 褐色砂質土	①(18.2)②9.3+ α	口縁ヨコナデ。体部外面はタテハケ、内面は下から上への縦方向ヘラ削り、内面屈曲部は横方向ヘラ削り。	A:4mm以下の白色砂粒、雲母をやや多量含む。B:良好。C:外黄橙10YR7/8、内にふい黄橙10YR6/4	
55	石製品	不明	谷部谷頭 褐色砂質土	長14.35幅7.25 最大厚4.4重645	表面は滑らか。	C:灰オリーブ5Y6/2	花崗岩。黒褐2.5Y3/1～暗オリーブ 褐2.5Y3/3の付着物あり。
56	瓦	平瓦	1区・2区間 奥部 表採	長12.9+ α 幅13.75+ α 最大厚2.85	凹面に布目痕、凸面に縄目のタタキあり。	A:5mm以下の白色砂粒を少量、微細な黒色粒をやや多量含む。B:不良。C:凸灰白5Y7/1、凹灰白5Y7/1～灰5Y6/1	

表4 本堂遺跡 11 次調査出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
57	須恵器	杯蓋	SX02 C区 埋土	①11.4②3.5	回転ナデ成形後、内面は不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B:良好。C:内外共 灰N6/	天井部外面ヘラ記号。
58	須恵器	杯蓋	SX02 B・C区間ベルト2層 SX02 C区 埋土	①(12.6)②4.3	回転ナデ成形後、内面は不定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラ削り。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外 灰 褐5YR4/2 ～ に ぶ い 橙 7.5YR7/4、内 灰 褐 5YR5/2	天井部外面ヘラ記号。
59	須恵器	杯身	SX02 P2	②2.0+α④(8.3)	回転ナデ成形。内面を不定方向のナデ。高台回転ナデ貼付。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共 灰白2.5Y8/1 ～ に ぶ い 黄 橙 10YR7/4	
60	須恵器	皿	SX02 B区 埋土	①(18.0)②2.25 ③(15.0)	回転ナデ成形後、底部内面不定方向ナデ。底部外面はヘラ切り後ナデ。板状圧痕あり。	A:0.5 ～ 2mmの白色砂粒をやや多く含む。B:良好。C:外 灰 白N7/ ～ 緑 灰 5G6/1、内 灰 5Y6/1 ～ 黒N2/	
61	土師器	甗	SX02 C区 埋土	②2.45+9.85+2.7+α	横ナデ成形後、体部外面タテハケ。内面は下から上への縦方向ヘラ削り。外面に煤付着。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B:やや不良。C:外に ぶ い 黄 橙 10YR7/2 ～ 橙 7.5YR6/6、内 浅 黄 橙 10YR8/4 ～ 橙 7.5YR6/6	各破片の接合は不可であるが、同一個体として実測。
62	須恵器	杯身	SX03 埋土 6層	①10.75②3.9 受部径13.4	回転ナデ成形後、底部内面を不定方向ナデ。外面3/5を回転ヘラ削り。口縁端部に細かい欠損あり。	A:1mm以下の白色砂粒を多く含む。B:良好。C:外 褐 灰 7.5YR5/1 ～ 灰 赤 2.5YR5/2、内 褐 灰 10YR5/1	底部外面にヘラ記号。口縁端部に細かい欠損あり。
63	須恵器	短頸壺	SX03 C区 埋土 2区 東側斜面検出中	①(10.0)②12.9+α	回転ナデ成形後、体部外面下半を回転ヘラ削り、体部内面下半をヨコナデする。	A:1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。B:良好。C:外 青 灰 10BG5/1 ～ 灰 5Y6/1、内 灰 5Y6/1	肩部に重ね焼きの色ムラあり。
64	石製品	石鐮	SX04 B区 埋土(カクラン除去時)	長2.5幅1.6厚0.4 重0.9	細身の縦長で、挟りが深い。中央部分でややくびれる。		安山岩?
65	硝子製品	瓶	1号カマ前庭部 1層	①2.7②24.0③6.25	型枠成形。	C:に ぶ い 赤 褐 5YR4/4	
66	須恵器	杯身	1号カマ 焼成部 9層(天井部崩落土)	②2.0+α④(7.5)	全面に 橙 7.5YR6/6 ～ 浅 黄 橙 10YR8/4の付着物。調整不明。	A:0.5 ～ 1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外 黒 2.5Y2/1、内 黒 2.5Y2/1	
67	石製品	石鐮	2区 東側斜面清掃時 (谷中央部)	長3.1幅1.9厚0.5 重1.8	細身の縦長で、挟りがやや深い。		安山岩?
68	石製品	石鐮	2区 南側斜面D区	長2.2幅1.8厚0.4 重1.0	挟りは浅く、二等辺三角形を呈す。		黒曜石。
69	モルタル?	土管	2区 南側斜面検出中	②23.2⑤(10.6)	外面は布目状の痕跡あり。内面は煤付着の為、調整不明。	A:繊維質を多く含む。B:良好。C:外に ぶ い 黄 橙 10YR7/2 ～ 褐 10YR4/6、内 ぶ い 黄 橙 10YR6/4	

Ⅲ．まとめ

まず10次調査の状況について、確認されたS X01は極めて大規模な造成をおこない、柵列（S A01）・掘立柱建物（S B01）を配置している。これらの遺構の性格については隣接する7次調査地の状況を明らかにした上で行うこととし、ここでの言及は控えておくが、S B01は規模の小さな建物であり、瓦葺きのものとは考えられない。明治の初めに編纂された『福岡県地理全誌』によれば、上大利村の項に「本堂寺。村ノ西南一町。小山ノ上ニアリ。」と失われた寺の在処を伝えており、S B01の在り方に重なるように思える。今後、周辺調査地の整理を進め、10次調査地を含め、本堂遺跡群の性格について言及していきたい。

また11次調査で確認された炭窯について、これまでの調査で牛頸窯跡群内においては、須恵器窯跡群と重複するように炭窯の存在が知られている。古代においては、笹原70号窯跡や春日平田遺跡において横口式の炭窯が調査されており、平安期には石坂E－1号窯跡のようなイチジク形プランの平窯が調査されている。さらに、山中には現在も石で周壁を築いた平窯が散在している。このように、牛頸窯跡群の周辺には時期的に須恵器窯の操業と一部重複しながら長期にわたって炭窯の操業がおこなわれているが、内容は不明な点が多い。今回の調査により、炭窯の操業が昭和40年代まで行われていることが明らかになり、製炭業の実態の一部を知ることができた。また、窯構造も13世紀第2～第3四半期に位置づけられた石坂E－1号窯跡に基本的に類似する。やや異なるのは、煙道部の作り方であり、石坂が、奥壁を溝状に掘り下げ、前面に石・粘土を貼っているのに対し、本堂では下半は奥壁を溝状に掘りこみ、前面に石を貼り、上半は掘り抜きで仕上げられる。さらに上部は69のようなモルタル製の煙突がつくものと思われる。こうした若干の差異はあるものの、炭窯としての基本構造は700年近く変ることがなかったのであろう。今後は牛頸窯跡群における古代の製陶・製炭遺跡の並行関係ならびに製鉄遺跡の在り方について注目し、森林資源の利用状況と生産遺跡の在り方の推移について検討を進めていきたい。

(石木)

圖 版



10次S X01南半部分（北から）



(1) 10次調査区全景（東から）



(2) 10次調査区全景（南から）



(1) 10次S X01北側全景（西から）



(2) 10次S X01北側遺構検出状況（西から）



(1) 10次S X01-1・2間
土層 (東から)



(2) 10次S X01-2・3間
土層 (東から)



(3) 10次S X01-4・5間
土層 (南から)

(1) 10次S X01-5・6間
土層（南から）



(2) 10次S X01-6・7間
土層（南から）



(3) 10次S X01-7・8間
土層（南から）





(1) 10次S X01-8・9間
土層 (南から)



(2) 10次S X01-9・10間
土層 (南東から)



(3) 10次S X01-11・12間
土層 (東から)



10次SA01・SB01全景（南東から）



(1) 10次S B01柱穴検出
状況（北から）



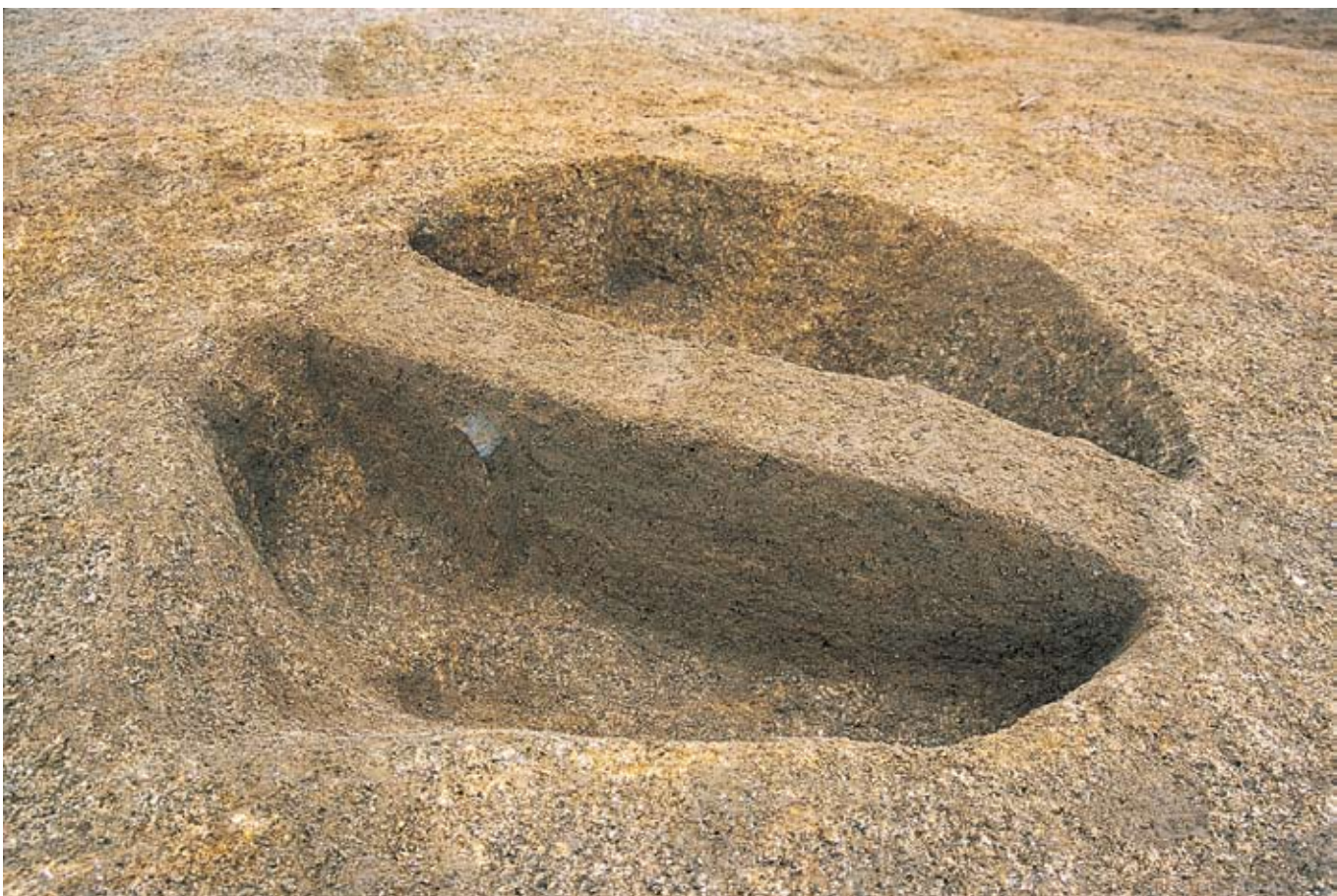
(2) 10次S B01の規模
（南東から）



(3) 10次S B01から7次
調査地（谷の部分）を
望む（西から）



(1) 10次S X02全景 (南から)



(2) 10次S X02土層 (南から)



(1) 10次谷部完掘状況（東から）



(2) 10次S X01調査状況（南東から）

(1) 11次1区全景
(南東から)



(2) 11次S X01全景
(北西から)



(3) 11次S X01土層
(北から)





(1) 11次2区全景（北から）



(2) 11次S X02全景（北西から）



(1) 11次S X03全景 (北西から)



(2) 11次S X04全景 (南西から)



(1) 11次S X02B・C間
土層（南から）



(2) 11次S X03土層
（北から）



(3) 11次S X04焼土検出
状況（北から）



(1) 11次1号窯跡検出状況（北から）



(2) 11次1号窯跡完掘状況（北から）



(1) 11次1号窯跡煙道部
全景（北から）



(2) 11次1号窯跡煙道部
断ち割り（北から）



(3) 11次1号窯跡排煙口
全景（東から）

(1) 11次1号窯跡焚口～焼成部縦断面土層（東から）



(2) 11次1号窯跡焼成部横断土層（北から）



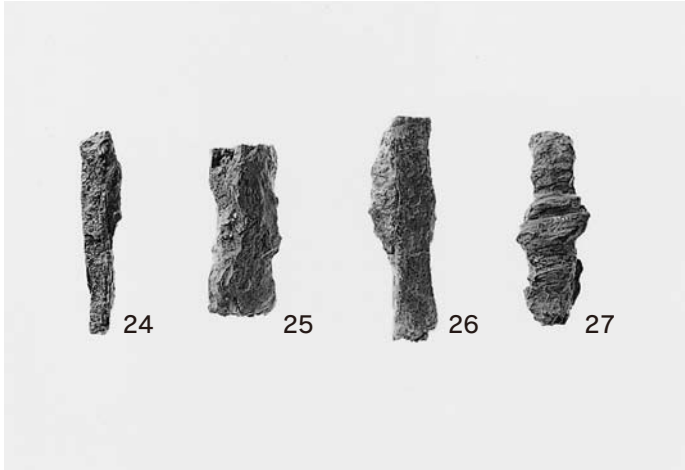
(3) 11次1号窯跡前庭部土坑土層（東から）

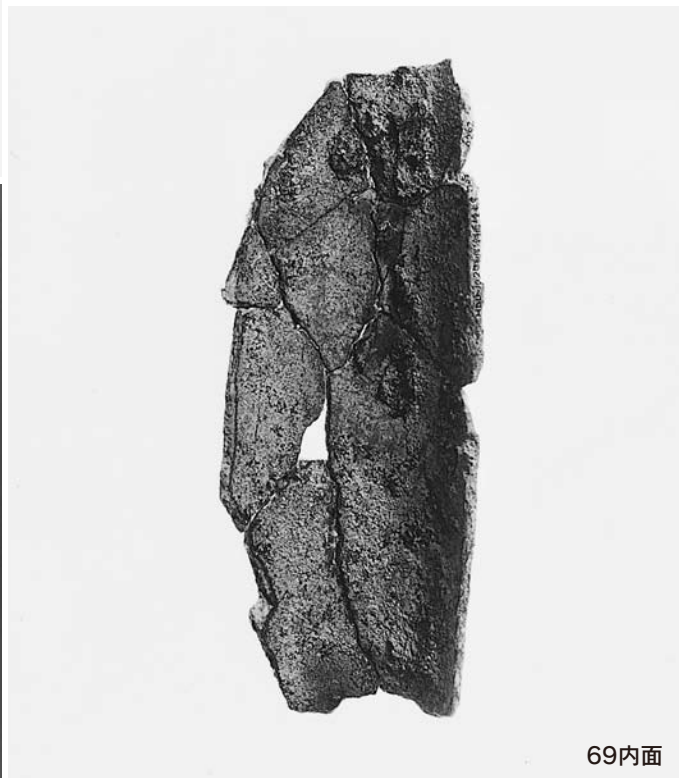
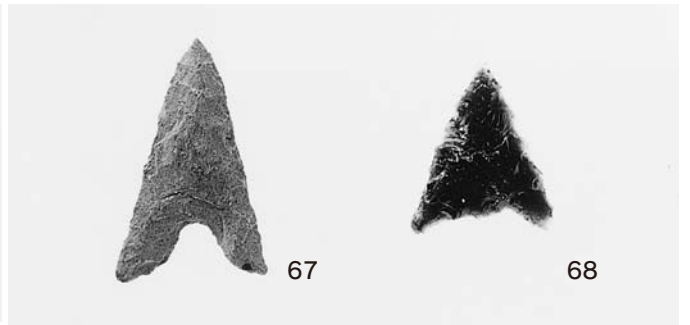


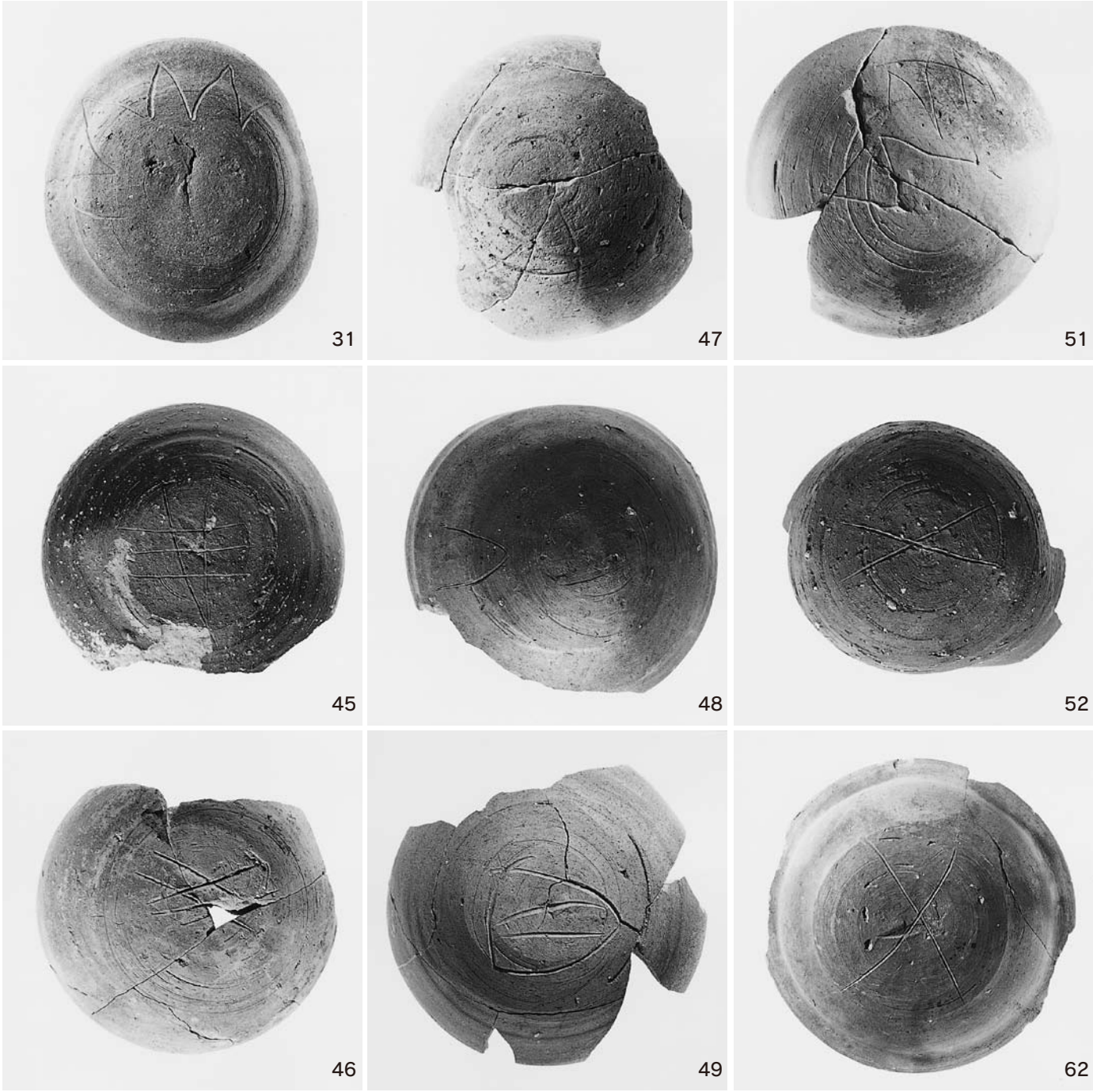


10・11次調査地調査前状況（北東から）









10・11次調査出土須恵器ヘラ記号

報告書抄録

ふ り が な	うしくびほんどういせきぐん よん								
書 名	牛頸本堂遺跡群Ⅳ								
副 書 名	上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻 次	Ⅴ								
シ リ ーズ 名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第75集								
編 著 者 名	石木 秀啓								
編 集 機 関	大野城市教育委員会								
所 在 地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092（501）2211								
発行年月日	2007年11月30日								
所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
ほんどう い せき 本堂遺跡 第10次調査	ふくおかけんおお の じょう し おおあざかみおおり 福岡県大野城市大字上大利657 他				33° 30′ 55″	130° 29′ 50″	2004.11.5 ～ 12.13	1,750 ㎡	区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
本堂遺跡 第10次調査	祭祀遺跡	古墳～平安	通路状遺構・掘 立柱建物1棟		須恵器・土師器				
要 約	本堂遺跡10次調査は、上大利北土地区画整理事業にともなう。丘陵の斜面をし字状に開削し、通路状の平坦面を造成している。通路状遺構の奥部には掘立柱建物が1棟確認され、その前面には柵列を巡らす。また、通路状遺構の斜面下方からは6世紀後半～7世紀前半の須恵器が多数出土しており、東側に隣接する調査区で確認された須恵器窯跡灰原の遺物が含まれる。掘立柱建物および通路状遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半である。東側に隣接する調査区においてもこの時期の土師器小皿・丸底杯が大量投棄されており、詳細は不明であるが、「急急如律令」と記された人面を描いた木簡や「大日如来」の墨書をもつ丸底杯の存在などから祭祀的な様相が強い。また、10次調査地における掘立柱建物も、建替えは認められず、その特殊な立地状況から居住用の建物であったとは考えにくい。明治期に編集された地誌には、「本堂寺」の存在が知られ、記された立地状況と合わせると、10次調査地における掘立柱建物は祭祀遺跡にともなう可能性が高い。								
所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
ほんどう い せき 本堂遺跡 第11次調査	ふくおかけんおお の じょう し おおあざかみおおり 福岡県大野城市大字上大利 614-1の一部				33° 30′ 50″	130° 29′ 45″	2005.2.1 ～ 3.25	1,100 ㎡	区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
本堂遺跡 第11次調査	集落跡 窯跡	古墳～奈良・ 現代	竪穴住居跡・ 炭窯		須恵器・土師 器・ビール瓶				
要 約	本堂遺跡11次調査は、上大利北土地区画整理事業にともなう。丘陵斜面に竪穴住居跡・炭窯が確認された。竪穴住居跡は斜面をし字状に切土して造成され、6世紀末～7世紀初頃ごろと考えられる。奈良時代の遺構については明らかにできない。炭窯はイチジク状の平面プランをとる平窯であり、灰原からビール瓶（昭和40年代ごろ）が出土した。上記のことから、丘陵上における住居の在り方と現代における森林利用の在り方が明らかになった。								

大野城市文化財調査報告書 第75集

牛頸本堂遺跡群Ⅳ

平成19年11月30日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 (株) 三光 福岡営業所
福岡県福岡市博多区山王1-14-4